

KH261-H12



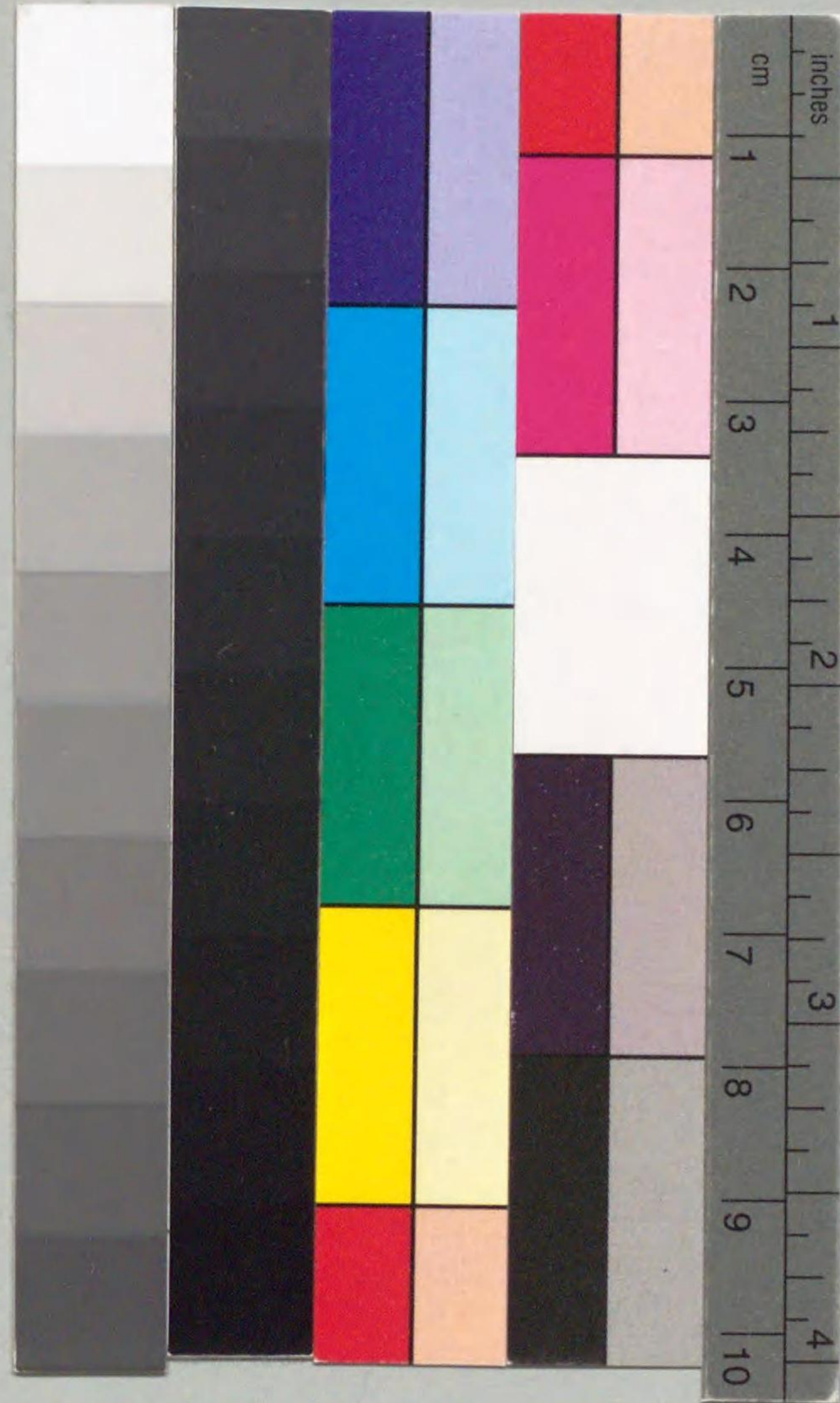
1200400104001

女 性 本 願 下

菊 池 寬



大 日 本 雄 辯 會 講 談 社 版



女 性 本 願 下

著 寬 池 菊



大 日 本 雄 辯 會 講 談 社

KH261-H12

目次

遺 <small>のこ</small> された嘘 <small>うそ</small>	正 <small>ただ</small> しき嘘 <small>うそ</small>	輕 <small>かろ</small> 井 <small>み</small> 澤 <small>さわ</small> にて	娘 <small>むすめ</small> の立 <small>たち</small> 場 <small>ば</small>	畫 <small>え</small> 家 <small>か</small> と戰 <small>せん</small> 争 <small>そう</small>
.....
三五	一〇六	七〇	三八	一



I 種
W



1200400104001

裝幀 風地孝四郎

畫家と戦争

花模様のプリントの洋服の布地を前にして、須磨子と美彌子は、ダオーグを開いて、型を
してゐた。

二人で手製にする、サマースーツのためであつた。

「いいの無いわ。皆少し重くるしかない……」

と、美彌子が云つた。

「ううね。」

「お母さま、もつと氣を入れて下さらなきや、いや……」

と、美彌子は、一寸身をもんで眉をひそめた。

去年は、到頭行き損つた輕井澤の別荘へ、今年は行かうとして、その夏の日に着るつもりで

る美彌子だつた。

勿論まだ三月近くもあつて、充分間があるのだが、紫陽花の咲いてゐる晝間、美しい布を踏つ

て、ミシンを踏みたい氣持になつてゐる美彌子だつた。

……輕井澤、立花が生きてゐた時でも泡沫のやりに、時が流れる避暑地の生活で、美彌子と二人ぎりであつたら、なほの事、思ふことなく爲す事もなく過すのであらうが、その無想無爲が須磨子にとつては辛かつた。

東京に居ても殆ど同じ事だつたが……。

ミシン臺の光つた木材の上に、ギラギラと輝く五月の日の光をさへぎつてゐた須磨子は、張り切つてるのね。ぢや、お二階の書棚に、マツコールが、あるから取つていらつしやい。』
「取つて来るわ。」

と、美彌子は、女中も呼ばずスタイル・ブックを取りに廊下へ出た。

彼女が、數冊の雑誌を手に持つて二階から馳け降りたとき、電話のベルが鳴つた。女中が、近くに居ないので、美彌子が電話に出た。

「もしもし、立花先生のお宅ですか。」

と、云ふ。その聲、その調子、絶えて久しい吉田であつた。

「吉田さん！ 美彌子よ。」

と、美彌子の聲は、マリのやうにはずんだ。

「美彌子さんですか。しばらく……僕召集を受けました。御挨拶に上りたいのですが、奥さんの御都合を伺がつて下さいませんか……」

「まあ、貴君が……一寸待つて……」

美彌子は、驚いて言葉がなく、そのまま須磨子の所へかけもどつた。

「吉田さん……何うしたつて……」

と、須磨子は、耳ざとく電話の聲を聞いてゐた。

「ええ。吉田さんが、召集になつたんですつて、お母さんの所へ御挨拶に上りたいんですつて……」

「まあ……」
須磨子の表情が、一瞬に動いた。激しい興奮から、眼の下がポーツと赤くなつてゐた。

「あの方に、兵役關係があつたのかしら……どうぞつて云つて頂戴！」

須磨子は立たうとはせず、じつと考へ込んだ。

吉田は、二時頃に來た。

その時、須磨子と美彌子とは、下の座敷で、軽い晝食の後、紅茶を飲んでゐた。

吉田の電話があつた後、母子はあまり話をしなかつた。しかし、それが少しも不思議でなかつた。二人は、何かお互ひの感情を、出来るだけ煙幕の下に、かくし合つてゐるやうであつた。二人共、緊張して平素よりも、美しく見えるやうであつた。

吉田は、一週に一度も二度も、顔を出してゐた頃と同じやうに、女中に導びかれて、二人の居る部屋に、どんだんはいつて来た。

美彌子には、母が妙に堅くなるまいと努力しながら、固くなつてゐるのが分つた。何時、召集令を受けたとか、身體は大丈夫だとか、何時入隊するのか、お母さんは吉田の出征中、名古屋へ歸るのかとか、表向きな會話がづついた。

美彌子は、機會を見て、席を外さうと思つた。自分が居ては、ほどけない感情のもつれが、二人の間にあるやうに思へたからであつた。

美彌子は、何気なく立ち上ると、二階の部屋へ行つた。其處で、一人になつて見ると、自分も度を失つてゐるのが分つた。卓子の上に、一山置いてある繪入雑誌を取り上げて、只頁の上を眼が走り廻るだけで、心はすべて吉田の上に集つてゐた。何故だらうと、自分を顧みる餘裕もなかつた。十五分位しか経たないのだが、随分長く居たやうな氣がした。

立ち上つて、ベランダに出た。其處から、下座敷の廊下寄りに、對坐してゐる母と吉田の姿が見えた。

吉田は、肩の一部しか見えなかつたが、須磨子は坐身の全部が見えた。

美彌子は、母の顔色の蒼いのに驚いた。病人のやうであつた。

美彌子の瞳は、母の顔に釘づけになつた。

須磨子の膝に、斜に陽が當つてゐる。兩掌が、キチンと重ねられてゐた。

その唇は、何時迄も動かかなかつた。

吉田の方も、端然と沈黙の相であつた。

先刻から、二人はあのままで向ひ合つてゐるのかしら……。

美彌子は、その二人を見てゐる裡に、頭の中のもやが、だんだん拭き拂はれて行くのを感じた。

自分との縁談を吉田さんに話したとき、吉田さんは、お母さんを愛してゐると告白したに違ひない。そして、お母さんも、心の中では吉田さんを愛してゐたのだ……。

自分の縁談があつたため、二人はかへつて遠くなつたのだ。が、二人が相愛してゐる事は、二人とももうお互ひに知つてゐるのだ。ただ、自分に對する遠慮から、どうにもならないのだ。吉田さんは、戦場に征く人である。愛情の證を握つて行つたならどんなにその働きに自信が付くだらう。

さう思ふと、美彌子は、自分こそ、二人の手を握らすべき、たつた一人の仲介者のやうな氣がして來た。

美彌子は、二人の居る部屋へ降りて行つた。

そして、須磨子の近くに坐つたが、須磨子のまたたかぬ瞳は、庭の若葉のしげみの一處に、じつと落ちたままだし、吉田のうつむいた唇元も、一文字に固く結ばれて、窮屈な空氣だつた。

「吉田さんは、何……？ 上等兵、伍長……」

と美彌子は、半分は須磨子へ訊ねる氣持で物を云つた。

「砲兵上等兵ですよ……」

と吉田の答は、明るくほほゑんだ。

「やう云へば、貴方が軍服を着てゐたことを思ひ出したわ。」

と、美彌子が云つた。

「吉田さんは、戦地へいらつしつても、主に繪を描くことになるかも知れないですつて、測量圖や陣地寫景など、とても正確なんですつて……」

と、須磨子が云つた。

「美彌子さん、繪だよりを送りませう。」

「待つてゐますわ。お身體何處も、わるい所ないの……」

「ええ。近年少し瘦せましたが、おかげ様で丈夫です。」

美彌子が加はれば、沈黙の堅くるしさは解けても、明るい平凡な話になつてしまひ、須磨子と彼の感情的な重大問題など、少しも表面には現はれようとはせず、美彌子としても、口のききやうがなかつた。

「何時お立ちになりますの……」

「入營は二十五日です。」

「後、八日しかないの……」

「ええ。」

と、吉田の顔に、しづかな微笑が浮ぶ。

「皆様も、どうぞお身體を大切に……」

「お歸んなるの……」

と、美彌子が云つた。

「今日は、三、四軒、挨拶に廻るつもりです。」

「つまんないの……もつと、ゆつくりなさればいいのに……」

美彌子は、頭を短かくしたので、一層、素朴に善良に見える吉田を今更なつかしく眺めるのを
つた。

「お母様お引き止めしないの……」

美彌子が、母に云つた。

「でも、御豫定がおありになるんですもの。お暇の日に、私達で、壮行會を開きませう。」

と、須磨子が云つた。

「あまり、御心配なされないで下さい。」

と、吉田は膝をすらせた。

「儂かないの……吉田さんに上げるもの。お守りになるやうなもの……」

と美彌子が云つた。

「あとで考へませう。」

と、須磨子が云つた。

「では……」

と云つて吉田は立ち上つて歩いたが、

「さう、さう。お願ひがあつたのを、すつかり忘れました。」

と、美彌子の方へ微笑を向け、

「東京の家を引き上げるので、小鳥や、犬を、御迷惑でなかつたら、此方へ預つていただきたい
のですが……」

「ええ。どうぞ、いいわねえ。お母様。」

と、美彌子は母を顧みた。

吉田が、歸つた後も、何となくあわただしい夕暮であつた。

ピオニーが、狂つたやうに、なきしきつて、門のベルが、何事かのやうに強く押された。

女中が、美彌子の居間に、西洋封筒のふくらんだ速達を持って来た。
船田郁郎からであつた。

「お母様は？」

と、美彌子は、女中に何気なく訊いた。

「奥様、御散歩かも知れませんが。普段着のまま、お出かけで……」
と答へた。

美彌子は、暫らく、その速達の封を切らうともせず、じつとしてゐた。

頭の中は、先刻から少しも變らず、母と吉田の事で、一杯であつた。

先刻、母の瘦せた手は汗ばんでゐた。

お醫者に、一度見せればいいのにと、この頃顔色の秀れない母の事を案じた。

やうやう、手に取り上げて封を切つた。ちよつと見ると、郁郎の字は、字の上手な女學生が書いたやうな、華奢なペン字であつた。

美彌子さま

先日は失禮致しました。

あの時、お目にかかつて、はつきり聞いて頂きたい事があつたのですが、お目にかかつてしまふと、持つて廻つたやうなお話ばかりしてしまつて、我ながらそのだらしなさに、あきれ居ります。もう一度會つて頂くより、手紙の方が自由になれるやうな氣が致しましたので……。

此處まで讀んで來ると、美彌子は相手が、何を云はうとしてゐるかは、よく解つたやうな氣がした。

僕は、貴女にお目にかかつた時から、貴女と結婚出来たらと眞剣に考へてゐました。僕の父は、自由な物分りのいい父ですから、結婚についても、何の干渉もしないと思ひます。貴女さへ御承諾して下さつたら、父はすぐ諒解してくれると思つて居りました。が、僕は、父に一步を先んじられてしまひました。父は、貴女のお養母様に、お目にかかつてから、たいへんな執心で、後添に迎へたい希望を、僕達に相談いたしました。僕達は無論双手を擧げて、賛成しました。が藤村氏夫妻の御盡力で貴女のお養母様の内意を伺つたところ、貴女のお養母様の御意志は、貴女の結婚をすましてから、御自身の事を決めたいとの御返事で、一時保留の形になつて居ります。お養母様が立花家の事を、第一に考へていらつしやる眞心には、

「私も感心しました。僕は、繪を描くことは出来ませんが、貴女を愛する氣持では、誰にも負けない自信があります……」

これはまさに求婚の手紙であつた。

美彌子の手紙は、更に懇願的になつた。

「僕は次男ですから、場合に依つては、他姓を名乗つてもいいのです。父も、さうした事には、理解ある裁断を下してくれると思ひます。どうぞ、お養母様とよく御相談なすつてもう一度、僕と會つて戴けないでせうか。」

もつとも、僕の身勝手ばかり考へて貴女にお約束の方でもあれば、僕は深く断念いたしま

す。ただ、そんな方のないやうに、祈つてゐるばかりです。
午前九時過から、五時頃までは會社に居ります。會社の電話番号は、丸ノ内三二一です。その他の時間は、大抵家に居ります。お返事を鶴首して待つて居ります。

郁郎

美彌子は、暫らく机の上に、この手紙を載せたまま眺めてゐた。吉田の出征で、心が感亂してゐるさうか、郁郎の手紙を見ても、何處かピツタリしない氣持であつた。机の一番下の抽斗を開

けて、そこへ放り込まうかと思つたが……一寸思案して、机の上の便箋や小箱や、使はないハンドバックの重つた下へかくすやうに入れると、机の前を離れて、階下に降りて行つた。

階下の廊下は、もう薄暗かつた。出合頭に、二階へ來ようとしてゐたらしい女中に、ぶつかつた。

「御免遊ばせ。」

と、女中は笑ひ顔で、

「奥様、おもどりになりましたが、御氣分がお悪いので、晩の御飯は召上らないので、御食事の御相談に……」

と、云ふので、

「御母様、そんなにお悪いの……」

と、美彌子は訊いた。

「いいえ、たいした事はございませんですが、ただ御飯は召上りたくないとおつしやるんです……」

『さう。』

と行きかかると、

「お嬢さま、お食事は……」

しつこく訊くので、

「何でもいいわ。チキンあるー」

「ございます。」

「ちや、チキンライスでもござへて……」

と、後向きのまま云ひ捨てて母の部屋へ急ぐと、障子を開けて中へはいった。

須磨子は、褥を重ね、羽浦團を被てほつそりと身を横たへてゐた。

障子のあたりだけ、仄白く、部屋の暗さは、電燈がほしいのだが、美彌子は母の氣分を察して、そのまま母の傍に坐り込んだ。

「お母さま、何うなすつて、お醫者呼びませうか。」

と、聲をかけた。須磨子は、首を上げて、

「御大相に見えるけれど、何でもないので……氣にしないで……」

と、云ふと、また頭を枕に當てた。

枕に頬を當ててゐる母の顔は、薄闇の中に蒼んでゐた。

「でも、この頃お復せになつて、私心配なの……」

「大丈夫よ。」

と、母は笑つて見せたが、その笑ひ顔も、わびしかつた。

美彌子は、その顔の輪郭がハッキリしない薄明の方が、心やすく自分の考へを言葉にする勇氣が出た。

吉田の入隊が迫つてゐる以上、今をはづすと永久に、その機會が再び來ないやうな氣がした。

「お母様ー」

と改めて呼んだ。

「何？」

「お願いがあるの……。一生に一度のお願い……」

「何でせう……」

「お母様に結婚して戴きたい方があるの……」

須磨子の息の根が止まつたやうに、静かであつた。

先刻、美彌子に來た速達を、女中が持つてゐるのを、(どなたから?)と訊くと、女中が裏を返

して見せた。それは、郁郎からの手紙であつたので、美彌子の云ふ結婚の相手もそれに關聯したものでないかと思つたからである。

『……………』

それは、誰と云ふ勇氣はなかつた。

『ねえ、お母さま、吉田さんと結婚して下さらない？』

『……………』

須磨子は、美彌子に心臓の只中を刺されたやうな氣がした。

『ねえ。お母さま、吉田さんと結婚して下さらない？』

美彌子は、くり返して云つた。

『藪から棒に……………そんな……………』

須磨子は、胸が急に苦しくなると、枕の上に顔を伏せた。

『結婚が出来なければ内縁でもいいわ。美彌子が證人になるわ。それが出来なければ、婚約だけでもいいわ。吉田さんは、お母さんを愛していらつしやること、私に分つてゐるの……………。お母さんも、吉田さん嫌ひぢやないと思ふわ……………。お母さん、思ひ切つて、結婚してあげれば、吉田さんにとつて一番の饒げだと思ふし、お母さんだつて、きつと幸福になれると思ふわ。さうすれば、私だつて自由に結婚が出来るわ。……………こんな事、私が云ふの生意氣だけれど、……………私お母さんも好きなの……………吉田さんも好きなの……………だから……………』

と、云ふと美彌子の顔には、自分でも思ひがけない涙が、湯のやうに流れた。

ほつそりと、身を横へてゐる須磨子からも、こらへかねたすすり泣きの聲が聞え、夜具が泣く音と共に、波のやうに動いた。

二、三日の餘裕は、既に自分の時間ではなかつた。晝描き仲間の送別會、それ以外の知人の送別會、同郷關係の送別會が、毎日つづいて、晝は親類の人達が集つた。

母の妹が、二十年も東京に住みながら、興奮すると、出でしまふ名古屋婦で、

『だから浩さんも、とろいこと云つてないで、お嫁さんを貰つて置いたら、お母さんかて淋しくないので……………』

と、云ふのに苦笑した。また、伯母が『浩さんも、晝ばかり描いてゐて、大砲引ばれるかね。』と、心配するので、

「砲兵でも、砲手、通信、自動車、観測など、いろいろ受持があるんです。僕は、今度の召集で、伍長になれますから、きつと観測伍長です。敵陣を観測して、寫景……つまり寫生をやつたりするので。」

と、云つた。

「砲兵でも、書を描くのかね。」

と、伯母は驚いたやうに云つた。

其處へ、母があわててはいつて來ると、

「立花さんの奥さんとお嬢さんが、お見えになつて下さつたよ。」

と、傳へた。

吉田も、この來訪は、豫期してゐなかつたので、びつくりして立ち上つた。

何時も家にゐる時は、和服を着てゐる習慣の彼も、この頃は改まつた氣持で、朝から洋服に着換へてゐた。

美術家らしい蓬髪が青々とした坊主頭に變つたので、年も二つ三つ若く見えた。

須磨子と美彌子は、二階の彼の居間に通された。

須磨子は、初めて見る彼の清潔な生活に、好意のある微笑を浮べてあたりを見廻してゐた。

白々と洗はれた、ふさふさした毛のサモイデは主人を守るやうに、一緒に階段を上つて來て、二人の女客を嗅ぎ廻るやうにした後、主人の後に、置物のやうに坐つた。お互に、軽く挨拶をすました。

十言以上も、いろいろな人語を鳴く九官鳥が、餌を貰つた後の、機嫌の上さで、さかんに鳴いてゐた。

「九官さん。はい、モシモシか……」

吉田が九官に云つた。

「モシモシかつて、何ですの。」

と、美彌子が訊いた。

「もしもし龜が、龜のかまでしか云へないのです。」

と、吉田が説明して、美彌子を笑はせた。

「吉田さん、今日ね……この間云つてらしたから、動物園をおあづかりに來たの……でも、このサモイデ馴れるかしら……何だか、吉田さんでなければ、承知出來ないやうな馴れをしてゐるわね」

え……』

美彌子は、母の顔を見上げながら云つた。最後の文句が、須磨子には皮肉にとれたが、まさか美彌子が意識して云つたのではないと思つた。

吉田は、サモイデの頭を撫でてやりながら、

『ちよつと、馴れにくいかも知れませんが、僕とこの部屋に居るときは、母がはいつて来ても償るときがあるのですよ。』

『可哀想に、ルビー、ルビー。』

と、美彌子が、犬の名を呼ぶと、犬は低くうなつた。

『吉田さん、今日もお時間ないの……』

と、美彌子が訊いた。

『晚六時から、會があります。』

『ちや、それまででもいいわ、世田谷へいらつしつてよ。貴方が一しよに来て下さればルビーだつて、安心するでせう。』

と、美彌子が云つた。

『それに、大事なお願いがあるの……』

と、美彌子が云つた。

『何です……』

吉田も、ちよつと顔色が動いてゐたが、須磨子は何を云ひ出すのかと、眼をみはつて美彌子の顔を見守つた。

美彌子は、しばし吉田の顔を真正面から見つて、

『私よく覚えてゐるわ。吉田さんが初めて、家へいらしたとき、……私七つか入つよ……獨りつ子で、吉田さんをお兄さん〜と呼んだでせう……ほんたうに、お兄さんだつたら、どんなにいいかと思つたこともあつたわ。』

美彌子の、この突然の懐舊に、吉田は黙つてうなだれた。

『私、今度こそ、ほんたうのお兄さまになつて頂きたいの……』

須磨子は、ハツとなつた。

『それは、何う云ふ事ですか……』

吉田は、そつと顔を上げて訊いた。

「此處にゐる私のお母様と、結婚していただきたいの……それが、無理なら婚約だけでもいいわ。何もおつしやらないで、さうして頂きたいの！」

美彌子の頬も赤くなつてゐた。一生懸命だつた、何か云ひ出さうとする須磨子の片手を、その膝に押しつけるやうにして、

「せめて婚約して戦地へ行つて頂きたいの……お母さまは、大體承諾して下さつたの……私の死んだお父様だつて、ちよつともお怒りになんかならないと思ふの……お母さまも、私も吉田さんも、幸福になれるんですもの……吉田さん、お母さんと、よく相談して下さい下らない……私、階下へ行つてゐますから……」

一気に、さう云ふと、美彌子は、サツと立ち上り、身をひるがへすと、階段を降りて行つた。

「美彌子さん！」

と、吉田が、呼び、

「美彌子さん！」

と、須磨子も、つづいて呼んだが、美彌子は彈丸のやうに、姿を消した。

吉田も、須磨子も、うなだれてしまつた。美彌子は純粹無垢な少女心で、世の中の慣習や、風

俗や、人情を無視して、いきなり二人の手を握り合はせようとするのであつた。

が、大人である吉田と須磨子の眼には、たとひ美彌子の云ふことが、人生の眞實であつたとしても、これを實現することに、いろいろな障礙があることが、ハッキリ分つてゐた。

吉田の母は、あわてて自分の姉に、浩の先生の令嬢として、美彌子を丁寧で紹介したり、淹れかけてゐた紅茶の一つを美彌子にすすめながら、

「どうぞ、お嬢さま、上にいらして下さいまし、此處は樂屋で取りちらかして居りますから……」

「ええ。いいの。少し此處に居たいの……御馳走になりますわ。」

と、紅茶に唇をつけた。

吉田の母も、さう云はれると、やや落着いて、そのあたりを片づけ始めた。

「いつお發ちですの……」

「二十二日でございます。」

「夜？ お發ちになりますの……」

「はあ……夜十一時の汽車で……」

「伯母様は、暫らく東京にいらつしやるんでせう。」

「はア、浩が発ちましたら、ポツポツ後片づけをして、當分こちらに居りたいと存じますの……」

「遊びに来ますわねえ。」

「どうぞ、私も、東京に獨りであつた方が、のんきなのでございますが、丁度あれの兄の嫁が、六月の末に子を産みますので、それまでに歸らうかと思ひます。それに、私が獨りであることを、浩が心配致しますので……」

吉田の母の言葉を聞きながらも、美彌子の心は、時々二階に行つた。

二階は静かで、小鳥の聲しか聞えて來ない。たまたま激しい聲で九官鳥が、

『ホーホケキヨ。』

と啼くのが聞えた。

美彌子は、何となく苛だつやうな氣持と、心からなる悦びとが、入りまじつて、全身をゆすぶるやうだつた。

母と吉田、それはほんたうに、お互にふさはしい二人だと思つた。

母と亡くなつた父とは、仲はよかつたが、母は美彌子の姉嬢のやうな位に置かれてゐた。父が

死ぬ三、四年の間、父は二階に一人寝て、母はいつも美彌子と同じ部屋に一しよに寝てゐた。これが御夫婦なのかしら、と美彌子は、少女心にも、何か不思議な氣がしてゐた。

須磨子位、美彌子の心を動かさし、美彌子を感化した女性はなかつた。美彌子の成長期に、須磨子は親身も及ばないやうな強い力で美彌子を愛してくれた。

美彌子も須磨子をいつも好きであつた。

吉田と云ふ存在も、人を好きになりやすい美彌子の年齢に、決して淡い存在ではなかつた。美

彌子は、随分吉田を好きである。

彼女は、自分が好きである人同志の結合を心から、悦びたいと思つた。

何か一瞬の寂しさを感じるのは、吉田が數日にして戦地へ旅立つ兵であるからだと思へた。

『奥さまに、紅茶を……』

と、吉田の母が、茶盆を持つて立ち上ると、美彌子は、

『私が持つて行つてあげるわ。』

と、立ち上つた。

大きな風呂敷で包まれ、乗物に揺られた九官鳥は、須磨子の家に来て、風呂敷を除られると、

隅の隅に、その濡れたやうな黒い身体をあはれなほど、小さくしてゐた。餌入れと水入れを入れてやると、暫らくためらふやうにしてゐたが、やがてとまり木に来て、餌をいばみ、
「お竹さん！」

と啼いたので、美彌子は安心しながら、

「九官鳥自身の鳴き聲つて、どんなんでせうね。」
と笑ひながら須磨子に云つた。

その外の小鳥類も、つつがなく平和に引き越しをすませたが、サモイデだけは、たいへんであつた。

ルビーは、立花家の静けさを底からくつがへした。

上ばかりに飼はれてゐたルビーは座敷のなるべく座蒲團を重ねた上とか、ソファの隅とかに、いつものつかつてゐた。そのルビーが、家の中でちらちらすると、庭にゐるピオニイが齒をむいて今にも飛びかからうとした。

そして、須磨子に叱られると、悲しい低音で、うなりながら、家のめぐりを啼きまはつた。それでも吉田の居る間は、ルビーは、おとなしくしてゐたが、吉田が見えなくなると、長い毛

の先まで震はせ、啼き立てた。

女中達は怖れて近寄らなかつた。

眞黒い作り物のやうな眼は、人を威嚇するやうに、キラキラ光り三角形の意地の悪さうな感じになり、茶の間の次ぎの間に身をかくして、須磨子達が近づいても、噛みつきさうにした。

「馴れるかしら……こんなで……」

美彌子まで、心配になつた。

「馴れるでせう。」

と、須磨子は云つたが、彼女も悲しくなつてゐた。

ルビーは、食事も攝らなかつた。一日に、二度食事をやることになつてゐたが、朝入れてやる皿の食物を、夕方になつても、一口も口をつけてゐなかつた。

逃げ出しさうなので、一室を閉め切つて其處へ置いたが、女中が襖を開けると、低くうなつた。

それでも、三日目には美彌子には、少し馴れて来た。

須磨子と美彌子とは、吉田を名古屋迄送ることになつてゐたが、美彌子は當日になると、私が

家に居てルビーの面倒を見なければならぬから名古屋迄は行かぬと云ひ出した。

ルビーは、衰弱が目立つて来たので、やつと馴れて来た美彌子が残つてゐなければ餓死するか逃走する危険があつた。須磨子は色々迷つた末、自分だけで行く決心をした。出立の日、思案に疲れたやうに、うるんだ眼で顔色がすぐれないのに、似合はないほど赤い唇をして、白い細い手でスーツケースのパチンを止めながら、

「美彌子さんを置いて一人で東京を離れることなんか、考への外だつたのに……」
と羞ぢらふやうに、微笑した。

長い長い列車の其處の窓にも、此處の窓にも出征の勇士の姿が見受けられた。

東京在住者が應召のために、故郷へ急ぐ姿であつた。

歡送の人達の唄ふいろいろの歌が、一つの物音となつて、プラットフォームをとよもしてゐた。

勇士は、その歌聲に耳をすまし、自分の妻子、肉親、友人、知己の心を一身に荷ふかのやうな表情をしてゐた。

感動的な情景が至るところに、展開されてゐた。

吉田は、灰色の背廣に、寄書の日丸の國旗を、斜にかけてゐた。

美彌子は、吉田の母と一しよに窓近く立つてゐた。

吉田は、友人らしい十五、六人が、手に手に日丸の小旗を持つて（天に代りて、不義を討つ）と唄ふ聲に、じつと心耳をすます姿勢で、立つてゐた。

色々な歌がくりかへされて唄はれ、吉田君萬歳！ がいく度も唱へられ、時は刻々と進んだ。發車のベルが鳴つた。

吉田は、明るく澄んだ微笑の這ふやうな頬をあげると、

「ありがたう存じました。では行つて参ります。」

と、ハツキリ云つた。

美彌子は人波に押されて後退してゐたのを、吉田の家の近所の人らしい在郷軍人が、

「お嬢さま、前へお出になつて下さい！」

と、人波を別けて美彌子を押し出してくれた。

美彌子が、涙が出さうなので、手に持つてゐた小旗を顔に當ててゐたので、その在郷軍人は美彌子を吉田の戀人か許婚者とも思つたらしい。

美彌子は、吉田の居る窓のすぐ下に出た。

汽車の笛が鳴った。萬歳の唱和が、嵐のやうだつた。

「おたつしやで……」

美彌子が云ふと、吉田は右の手を差し出して、美彌子の手を握ると、

「ありがたう」

と、一瞬強く振つた。

それは、見送りに對する感謝でなく、この二、三日前からの美彌子の心づかひに對する深い感謝の心が、こもつてゐたのであらう。

須磨子は、見送りの人達の目をさけて、そつと二等車に乗つてゐる筈である。

須磨子は、名古屋まで見送ることを、吉田の母に知られることさへ、嫌がつてゐた。

「私はお友達と映画を見に行つて、それから来ましたの、お母さんは、家から直接いらつしやる筈なのよ。何うしたんでせう。」と、美彌子は、母のために、嘘をついてゐた。

織つて置いたと云ふより、忘れてゐたラクダ色の毛糸が、四オンスほど戸棚を整理してゐたら

出て來たので、それで吉田のために、防寒用の靴下と手袋とを、大いそぎで、編み始めてゐた。

間に合はなければ、勿論後から送ればいいのだが、須磨子は吉田と別れる日まで、何かして居なければ、心が落ちつかないので、せつせと編み物をつづけてゐた。

靴下は、編み上り、手袋も片方だけ編めば出來上るので、彼女は汽車の中に持つてはいつて、一心に編みつづけてゐた。

車室が違つてゐたし、混んでゐたので、吉田と須磨子とは、話が出来なかつた。

須磨子の居る横の席は、小田原で空いたが、彼女は別に吉田を、呼びに立たうとはしなかつた。

吉田も、先刻食堂で、同じ卓子につき、二言三言話して、別れたきり姿を現はさなかつた。

車内の乗客達は、何時か居眠りを始めてゐた。その聲は、うすい光に照されてゐた。

その薄暗さでは、編物はとても辛かつたが、須磨子は、もう意地になつたやうに編物を止すことが出来なかつた。

静かな真夜中を走る列車の音が、切羽つまつた窮地へ、自分を追ひ込んでゐるやうな氣を感じさせた。さう感ずると、須磨子はいよいよ編物の手先を、せはしなく動かした。

(何時頃かしら)と、手頸の寶石入りの小さな角時計を見ると、蟲のやうな短針が二時を指してゐた。

須磨子は、一寸びつくりした。

何時の間に、こんなに時が飛び去つたのか、さすがに頭をしめられるやうな疲れを覺えた。

須磨子は右手で、こめかみをほさむやうにおさへると、座席の後のかたいクッションに身をもたせた。

身體は絶えず揺ぶられ、驛に着くたびに、ガクツと前に持つて行かれたり、後へグンと引きもどされたりした。

が、眼を開けるのが、ものうかつた。そんな時が、どの位経つたらう。須磨子は耳許で、

『ちよつとーもし。』

と、云ふ聲を聞いた。

相變らず、薄く光つてゐる電燈の光の中に、ポーツと吉田が立つてゐた。

『もう、名古屋ですの……』

吉田は、首を振つた。そして、突然思ひ切つたやうに、

『この次ぎで、降りて下さいませんか。岡崎で……どうぞ。』

と、云つた。

須磨子は、彼の眼をみつめてゐる内に、ガクツと大きくうなづいて見せた。

その驛は夜明の驛であつた。

改札を出ると、吉田は小聲で云つた。

『昨日、兄のところへ電報を打つて置きました。途中で、一日休養を取るから、二十四日の午後着くと云つて置きました。このまま、名古屋へ行きましたら……貴女とお話することも出来ませ

んし……』

須磨子は、つづけざまに、大きくうなづいただけで、何も云はなかつた。

驛には、最少限度の驛員しかゐらず、驛前の店々も、まだ戸を閉めてゐた。

吉田は、前の自動車屋のガラス戸を開けようとしたが、開かなかつた。

『驛の待合室で、少し待ちませう。』

二人は寄り添つて、驛の方へ引き返して來た。

風は全く無く、今明けようとする空の色が神秘であつた。

「貴君と、こんな時、こんな場所に、二人ぎりて居ようなどと、夢にも思はなかつたわ。」
と、須磨子は、低くつぶやいた。

「僕もです。夢のやうな気がします。召集令が、僕にこんな大きい幸福を一しよに持つて来てくれようとは思ひませんでした。でも、僕は美彌子さんに、どんなに感謝していいか分らないと思ひます。美彌子さんの純真な眼と心とが、僕達をむすびつけてくれたのだと思ひます。あの人は、何でも知つてゐるのですな、僕達の心の奥を、あの人はちゃんと見抜いてゐてくれたのですな。」

吉田は、しみじみと述懐した。

「私、あの子にわるいと思つてゐますわ。悪意はなかつたのだけれど、あの子をダシに使つたやうになつてしまつて……」

待合室の暗い電燈の下に、二人は並んで坐つた。

「これで戦争も、思ひ切りやれると思ひます。貴女と僕とが、一しよに居れる時間は、今日一日だけです。僕が戦死したら、僕の人生でたつた一日だけになるかも知れません。しかし、この一日があるために、僕の今迄の生活が、忽ち實を結んだやうな気がします。僕は、何か人生で、纏

んだやうな気がします。戦場へ行つて、生死の境に立つてゐる間、貴女に愛せられてゐると云ふことが、どんなに僕にとつて力強いことだか……僕は、貴女に感謝します。そして美彌子さんに感謝します。」

いつも、寡言な吉田が、何かに憑かれたやうに、喋べつた。

須磨子は、吉田のやうに單純に喜べなかつた。吉田を愛してゐる自分には、とつくに気がついてゐた。が、須磨子の求めてゐるものは戀愛の烈しい感情と云ふよりも、もつと具體的なものであつた。愛する者の子供を産みたいのであつた。

待合室の電燈がふと消えたと思ふと、何處かで雀の鳴く聲がしてゐた。

海の見える二階の部屋であつた。

朝の日の光を受けて、さざなみ立つてゐる海の面を、眩しい眼で眺めてゐると、須磨子は、だんだん氣が落着いて來た。

底の見えさうな遠淺の海上二、三町のところ、江の島を小さくしたやうな島があり、此方の陸から島まで長い長い橋がかかつてゐた。

眼下の庭園は、小松のところどころに生えた芝生の美しい庭だつた。
『少し歩きませうか。御飯は、まだ、なかなか出来ないと言つてゐましたよ。』と、吉田が云つた。

須磨子は、うなづく吉田と一しよに階段を降り、庭下駄を穿いて芝生の庭へ出た。
何處の部屋も、まだ雨戸がしまつてゐた。人目のあまりない内に、一まはり、歩かうと云ふ吉田の氣持であらう。

庭園から石段を降り階に出ると、肌をうるほすやうな海の風が、氣持よく、二人の頬を吹いた。

須磨子は、自分の全身の細胞が若くしく脈打つてゐるのを感じた。

海の色は、遠くバラ色に光つてゐた。白い鷗が羽根で、波を切つて行くのが見えた。

『僕も、貴女も假面を、美彌子さんに、ひんむかれたと云ふことになるのですかな……』
吉田は眞直ぐに海を見ながら云つた。

『……………』
須磨子は、だまつてゐた。

『貴女と婚約したことを、兄や母にだけ云つて置きませうか。でも僕が、萬一戦死したときなど、婚約があつたと云ふことは、却つて貴女に御めいわくをかけやしないかと思つて……』

『貴君にお委せるわ。どんな事があつても、迷惑なんて思はないわ。』

さう言ふと、須磨子は、吉田の足もとに、しゃがんだ。

彼女は楽しい幼さを感じた。

立花に感じてゐた、年齢や人格から来る壓迫の全然ない女性本來の愚に返つたやうな幼さを感じた。

彼女は吉田の足もとの砂を手で攪んでは、サラサラと落した。

『でも、僕が戦死した場合、今日たつた一日のために、貴女の運命を狂はしたりすると……やはり、婚約なんかしないので、このままお別れした方がいいのではないでせうか。』

『そんな御心配いらぬわ。貴君は生命を賭して、戦争にいらつしやるんですもの……私だつて、貴君のために……半生の運をかけてもいいわ……』

陽は、やや高く、麗かに照り、海岸には夜釣りに出てゐたらしい釣舟が歸つて來始めた。

娘の立場

須磨子が居ないと、家の中は限りなく淋しかった。

獨りつ子の、人一倍淋しがりやに育つた美彌子は、母が居ないので、女中達が、ひっそりと樂しげに、女中部屋に居ると、それさへ妬ましくなるほど淋しかった。

午後になると、到頭たまらなくなつて、女中を呼んだ。

「果物を、みんな持つて来ない？ おあきさんも呼んで、三人で喰べませう。」
と命じた。

そして、果物を喰べてゐると、船田から電話がかかつて来た。

美彌子は、ちよつと顔が赤くなつた。あんなに眞面目な手紙に、まだ返事を出してゐないことが、氣がとがめたのである。

彼女も、昨日、今日、義母と吉田との事で、胸が一杯で、それ以外の事は、かすみを隔てた遠い世界の出来事のやうな氣がして、考へなかつたのである。

「もし、もし、美彌子さんですか。」

電話に出ると、向ふから云つた。

「はあ。」

「僕、船田です。」

「先日は……お手紙を……ありがたう。」

「いやア……」

郁郎が、テレてゐるのが分つた。

「お返事遅れてすみません。」

「いいえ……今日、會つていただけでせうか。」

「駄目なんです。母が旅行してゐますから、歸りましたら……」

「御旅行ですか、お一人で……」

「ええ……急用なんです……」

「ぢやア、お歸りになつた頃に……」

郁郎は、歴々と失望してゐた。美彌子は郁郎を自分の家へ呼ばうかと思つたが、自分の答へが……根本的な氣持が、定まつてゐないので、よした。

『はあ、どうぞ。』

『ぢや、失禮しました。左様なら……』

『さやうなら。』

美彌子が、座敷へもどつて來ると、二人の女中が、勢よく笑つてゐた。

『何をそんなに笑つてるの……』

と訊ねると、年上のふみさんが、

『おあきさんが、頭を短くなすつた吉田さんが立派だつたと云つて、この間から吉田さんのことを賞めてゐるんですの……』

美彌子は、ちよつと不快だつた。すると、おあきさんは、肥つたへうきんな顔を取りすまして、

『先達新聞を見ましたら、アメリカの五つ児が、とても大きくなつてゐましたわ。』

と、困つた時とほけて出鱈目を云ふいつもの癖を出したので、美彌子もブツと吹き出してしまつた。

が、笑つた後が、またたまらなく淋しかつた。

電話で話したばかりの郁郎のことは考へず、母と吉田との事を、また考へてゐた。

夜汽車で行つて、翌日の汽車で歸京すると云つた母に、それでは疲れるから、名古屋で一泊するやうに、すすめたのは美彌子だつたが、やはりその夜は須磨子の歸りが待たれた。しかし、須磨子は到頭歸らなかつた。中日隔いた日の夜十時近く歸宅した。

見るからに、病人ではないかと思はれるほど、疲れた表情であつた。が、神経は可なり興奮してゐるらしく、美彌子が、

『少し、お休みになつたら……』

と、云ふのに、ろくに坐りもせず、お風呂にはいつて髪を洗つたりした。

須磨子には、ちつとも馴染んでゐなかつたルビーが、須磨子が歸つて來た途端に、須磨子の後ばかり追つて歩き、美彌子が呼んでも振り向きもしなかつた。廊下を歩くルビーの爪の音が、チコチと悲しかつた。

須磨子がお風呂にはいると、須磨子の脱ぎ捨てた着物の廻りを、鼻を鳴らして廻つてゐたが、やがてそれを守りでもするやうに、ゴロリとその横に寝そべつて、險惡な眼をした。

『ルビー。お母さんの着物に觸はつちや駄目よ。』

と、美彌子は叱つたが、ルビーのさりした行動を見てみると、この二日の養母の上に、自分が想像してはいけないことを想像してゐることが、淋しくなつたので、自分の部屋に引き上げた。暫らくして降りて来ると湯殿から出た須磨子が、ナイトクリームを薄く塗つた顔や衿に、クリームのべたつかぬ程にパウダーをはいた顔で、敷かれた寢床のそばに坐つてゐたが、美彌子のはいつて行くのを見上げて、

「少し風邪氣味らしいの。」

と、云つた。

「ちや、湯覺めなならない内に、おやすみにならなきやー」

と、須磨子に云つたが、唇が赤すぎると思つた。

「口紅、おつけになつたの……」

「いいえ。」

と、云つて須磨子は、舌をうごかして唇をなめたが、そのために唇は一層生々しく見えた。

美彌子は、須磨子が、きつと熱があるのだと思つた。

「ルビーは、私が歸つて来ると、急に私にやさしくなつたわ。」

と、須磨子は、タオルの腹衣の衿をかきあはすやりにしていつた。

「そりや、お母様に、吉田さんのうつり香がするからよ。」

と、美彌子は、つい本當の事を云つてしまつた。

すると、須磨子は、バツと頬を染め、

「いやよ。美彌子さん。そんな事を云つちや。何處かへ消えてしまひたくなるわ。」

と、いきなり美彌子の肩先を抱いた。

美彌子は、その夜近頃にならないほど、若々しく女らしい母を見て、そのために却つて、彼女と、

須磨子との間が遠くなつたやうな淋しさを感じるのだつた。

須磨子は、美彌子の肩の上で、軽くせき入つた。

「お母さま、御病氣かも知れないわ。明日は、お醫者に見せなければ、随分おせきが出るわ。」

と、云つた。

「大丈夫よ。病氣なんかならないわ。」

と、須磨子は、ほんたうに元氣に云つた。

吉田を送つて行つた須磨子が、名古屋でどんな風に、吉田と別れて来たのか、美彌子は知りたかつたが、母が話さないのので、美彌子も問うてはならないやうな気がして、その話に觸れなかつた。

二階へ上つて、寢床にはいつたが、いつもは寢付きの早い美彌子だが、なかなか寢つかれず、階下で時計が十三時を打つのを聞いてからやつと眠についた。

緋鯉、白茶けた鯉、黒く光つてゐる鯉、しほりのやうな鯉。

鯉、鯉、おびただしい鯉が、いかにも楽しげに泳ぎ廻つてゐる。家の泉水には、こんなに居ない筈だと見てゐると、中心の水が渦のやうになつたと思ふと、鯉はかき消すやうに居なくなつた。

と、美彌子はいつの間にか、水の中にはいつてゐる。水の底を、赤腹デデンと云ふお腹の赤い、とかげに似た奇怪なものが、白い小さな魚を追つかけてゐる。そしてパクリと喰ひついたり思ふと、もう一尾、同じやうな赤腹デデンが現はれて、もう死んでしまつた魚に喰ひついたり。

二尾の赤腹は、一つの餌に喰ひついたら、身動きもしないでゐる。

美彌子は、自分が水中にゐて、こんな生物の傍にゐることが、淺ましく思ひ苦しかつた。早く逃

れようと、足で思ひ切つて、強く水を蹴ると、フンハリと身體が、水面に浮び上つた。見ると、いつの間にか水着を着てゐるが、身體全體が、生臭いやうで、こんなでは、きつとルビーが、自分を嫌がるのではないかと思ひながら、岸を見ると、岸には吉田が立つてゐた。

『御免なさい。ほんたうに。』

美彌子は心から詫びた。

『あやまることなんかありませんよ。』

『でも……水の底にゐたのですよ。』

『いいですとも……』

『ぢや、みんな知つてゐて下さいましたの……』

『ええ。』

『ああ。よかつた。』

と、美彌子は、子供のやうに云ふと、彼の腕の中に飛び込んだ。

額の上に、吉田の顔が落ちて来たので、美彌子は恥しさで身をもがいた。

目が醒めると部屋の中はうす暗かつた。が、雨戸の隙間から、ほのかな光がさしてゐる。その

光の感じでは、夜が明けてゐるらしい。間もなく階下の雨戸をくる音がきこえて来た。

美彌子は、この明け方の覚め際に見た夢が、ハッキリ残り、その鮮明さに、胸がドキドキするやうであつた。

何うして、こんな夢を見たのか、彼女は不思議でならなかつた。

嘗つて吉田の夢など、見たかも知れないが、一つも覚えてなど居ないのに、吉田が出征することになり、しかも母と婚約が結ばれて、自分との縁談など、自然消滅になつた今になつて、何うしてこんなにも、鮮かに、胸に刻まれるやうに、彼の面影を夢の中などで見るのであらうか。

何だか、自分で意識しない心の底の方を、のぞいたやうな気がして、美彌子はたまらなく、わびしい氣持がした。

彼女は暫らく枕の上に、びつたりと頬を伏せてゐたが、やがて起き上ると、自分で夜のものを疊んだ。

水色がかつた緑色のブラウスに藍色のスカートをつけると、洗面所に降りて、水で口をすすぎ、顔を洗ふと、何から何まで、忘れ去らうと、彼女は唄を歌ひながら、ピオニイの鎖を曳くと、朝のさわやかな道に飛び出した。

が、いろいろな歌を次ぎ次ぎに口ずさんでゐると、

あはれ君は行き

われはただ一人

なつかしの地にぞ君を待つのみ

と、歌つて来ると、また吉田のことを考へさうになつたので、ピオニイの鎖をゆるめピオニイ

が走り出すままに、美彌子も思ひ切り後から走つて、いつも犬を散歩させながら、お参りする小さい神社の境内まで来ると、美彌子も、すっかりほがらかになつて、もう何も考へなくなつた。

すると、同じ境内に、これも朝の散歩と見え違ひしいシエパードが二十ばかりの書生さんらしい少年に曳かれてはいつて来たが、牝で氣の強いピオニイが、必死になつて飛びかかつて行かうとするので、美彌子はびつくりして、ピオニイの鎖を強く引きながら家の方へ引き返して来た。

家へ歸つてピオニイを庭へ離して、家へ上つたが、母はまだ起きてゐなかつた。

茶の間には朝食の卓子が用意されてゐた。美彌子は、いつも朝の早い須磨子の部屋をのぞいたが、蒲團の間から、黒い髪の毛が見えるだけで、母は死んだやうに寝しづまつてゐるので、美彌子は、そつと茶の間にもどると、一人で先に朝食をすませた。

朝食をすまして、新聞を讀んで、時計を見ると、もう九時を廻つてゐるのに、母はきてまだ來なかつた。

美彌子は、少し心配になり、

「お母様ア。」

と、部屋の外から聲をかけて、中にはいつて行つた。

と、須磨子は、胸から上を出して、眼をさましてゐたが、頬は上氣してゐるやうに、もも色がかつてゐた。

眼もうるんでゐた。

「何うかなすつたの？」と美彌子は枕元に坐つた。

「私、風邪引いたらしいわ。頭も重いよ。體溫計があつたら、出して頂戴！ 鏡臺の右の抽斗の上だと思つてゐるんだけど……」

美彌子は、抽斗から體溫計を探し出すと須磨子に渡した。

それを、脇にはさむと、

「其處開けて下さいな。」

と上眼を使つた。美彌子が、雨戸をあけ、カーテンを引くと、縁側から障子ごしに、明るい光が部屋の中に流れ込んで來た。

「いいお天氣ね。」

「とても。先刻、ピオニイを連れて、散歩して來たの。そしたら、お腹が空いたから、御飯たべちやつたの。お母様あんまりよく眠つていらしたから、お先へいただいたの……」

「さう……もういいかしら。」

須磨子は體溫計が氣になるらしかつた。

「一分計だけれど、二分位入れといた方がいいわ。」

須磨子はちよつと眼をつむつて、時の經つのを待つてから片手で體溫計をとり出し、と見、かう見してゐたが、

「いやアね、こんなにあるのかしら？」

と、さし出すのを美彌子が、受けとつて見直すと、水銀は八度六分まで上つてゐた。

「お苦しくないの？」

「胸が少し苦しいの？」

「大橋先生に来て頂きませうよ。お電話かけるわ。」

と、美彌子は立ち上つて廊下へ出た。須磨子はそれを止めようとはしなかつた。亡くなつた父の主治醫で美彌子も、赤ん坊の時から先生である。

青山から来てくれるので、往診は遅れがちであつた。それで、先生を早く來させるため、立花家では誰か病氣の時は容態を、少し大袈裟に云ふ癖になつてゐた。

美彌子が、電話に出て、須磨子の容態を云ふと、午後に伺ふと漠然たる返事なので、美彌子は、少し業をにやし、

「なるべく早く來て下さらないと、ほんたうに熱が高くて苦しうなんですから……」
と云ふと、先生は、

「はい。はい。」

と、少したよりない返事を重ねた。

午後まで待つのはなかなかであつた。

「お母様、何か召し上りたくない？」
と、訊ねると、

「何にも……」

と、須磨子は、一寸目をふさいだが、

「ちまぎの羊かんか、水羊かんのやうなものを喰べて見たいわ……」

「この近所に、おいしいのあるかしら？」

「いいのよ。ただ考へてゐるだけで、樂しいの……冷たくて、甘いものを……」

「いやなお母様、ぢやゼリーでも作りませうか。」

「ええ。」

美彌子は、臺所へ行つて、冷蔵庫の果物を、いろいろ入れて、ゼリーを冷した。

冷たく固まつたのを、母の部屋へ持つて行くと、須磨子はまたうとうと眠つてゐた。

ひどく疲れてゐるやうな、その寝顔を見ていると、何となく、かりそめの熱ではないやうな気がした。

美彌子は、二十分ばかり坐つてゐたが、母が目覺めないのです、そつと母の部屋を出た。

大橋先生が來たのは、四時に近かつた。
診察をした後、

『風邪を引いてゐますな。』

と、云つて風邪によく利くと云ふ注射をしてくれた。

しかし、手を洗つて紅茶の茶碗を取り上げると、

『熱は、間もなく下るでせうが、當分静養なすつた方がいいですな。』
と、云つた。

美彌子は、聲を呑んだ。

須磨子は、ひどく明るい聲で、

『胸がわるいんでせうか。私のやうな年でも、發病することがあるんですの……』
と、云つた。

『そりやあ、ありますよ。一度レントゲンを取つて見ませう。』
と、云つた。

須磨子は、だまつて天井を見てゐた。美しく明るい表情であつた。

『少し静養なさると、直ぐよくなります。この夏は、輕井澤へ行かれるんですね。』
と、醫師は云つた。食餌の注意などをしてから、醫師は歸つて行つた。

美彌子が醫者を送つて、歸つて來ると、

『御免なさい。病氣にまでなつて……』

と、須磨子は云つた。

『いやよ。そんな事云つて……』

『私、自分でも少し疲れ過ぎてゐると思つてゐたの、この頃……』

『……』

暫く二人はだまつてゐた。

須磨子は、何か思ひ出したやうに、

『すみません。貴女に心配をかけて……』

美彌子は、須磨子の伸した手をそつと握つた。

須磨子の容態は、思はしくなかつた。七度五、六分の熱が、何日迄も引かなかつた。

大橋醫師は、葡萄糖カルシウムの注射や、結核免疫原の注射をした。

一週間に、二度位の割で、往診に來てくれた。

半月位して、池田さんと云ふ看護婦を向けてくれた。

優しい、よく気のつく、いかにも、純潔な感じの女性であつた。

須磨子の病室は、二階のもと父の居間だつた部屋に移された。明るくて、日光もよく當るからである。

夜も、雨戸を開けたまま、寝るやうにした。

池田さんの持つて来た二週間附の温度表には、午前中六度三、四分と午後七度五、六分と云ふ線が引かれてゐた。

赤血球沈降速度も、よくない状態であつた。食欲不振、發汗多量、睡眠不足。病氣は持久戦にいつたものらしかつた。

須磨子は、割合と落着いてゐた。美彌子も、いくら躍起になつても、かうした病氣が、簡單に、なほらないことが解つてゐるので、彼女も次第に落着いた。

病室の中で、ソファに腰かけたり、人なりに冗談もふふりになつてゐた。

うつたらしい梅雨期にはいつた。もう少し、熱がとれたら轉地することになつてゐた。

美彌子にとつても須磨子の發病と、その心配とで、月日がはやく經つてしまふやうに感じられた。

徹郎から、その後一度電話がかかつて来たが、母が病氣だと云ふと、遠慮したのか、それぎり音沙汰がなかつた。

六月のカレンダーも、もう二、三枚しか残つてゐない日、戦地の吉田から、初めて便りが届いた。名古屋を出發するときに、挨拶状をよこしてから、一月近くも跡絶えてゐた手紙であつた。

美彌子には、支那の姑娘のエハガキに簡単な文句が書いてあるだけだつたが、須磨子への手紙は、ハトロン紙の封筒にはいつてゐた。

美彌子が、それを持つて行くと、須磨子は、嬉しさに微笑したが、すぐには封を切らうとせず、白いシートの上にそつと置いた。

『お切りませうか。』

と、池田さんが、心なく訊ねると、須磨子は、しづかに首を振つて、

『後で。』

と、云つた。

『御氣分がよいやうですね。』

と、池田さんは明るい顔をした。

美彌子は、母のために、

「池田さん。下でお紅茶を召し上りませんか？」
と、誘った。

「ありがたうございます。」

池田さんは素直に答へた。

留くして美彌子が、二階へ上つて行くと、須磨子は、ニコニコ笑ひながら、無言で吉田の手紙をさし出した。

「何うするの？」

と、訊ねると、

「これを貴女にも見せたかつたの。」

と、若々しく微笑した。美彌子は、さう云ふ義母に、自分の不思議な感情を氣取られはしないかと、その書簡箋を手にした。

○ 昨日の朝、雨の降る中を、僕等の乗つた船は、揚子江の××に着きました。

爆弾砲聲の聞える明日よりの戦場を前にして、誰もが手紙を書いたり、日記をつけたりして

みます。

今日は、午前中から、大砲、自動車、馬の陸上げで大變です。雨はだんだん晴れて大變な暑さです。

ひきかき廻される音の世界で、内地にゐたときの生活が、すべて遠い別世界の出来事のやうな氣がします。

はるか上手にゐる味方の軍艦が打つ砲火が凄しく水の上に光ります。

ルビーの奴馴れたでせうか。

美彌子さんによろしく。

淡々と書いてゐることが、吉田が戦争に對し、心澄んだ覺悟が出來てゐることを物語つてゐるのであつた。

美彌子は、すぐ砲火にさらされる彼の事を思ふと身内がどこか慄へるやうな氣がした。

「敵前上陸なされたのかしら……」

美彌子が云つた。

『さあ……。もうよほど戦争をしてゐるわね。手紙の日附から、十日以上になるんですもの……』
『お怪我なされないかしら……』

『暑いと云ふのに、靴下なんか持たしてあげて、ガツカリしたわ。後で送つてあげればよかつたのに……』

と、須磨子は云つた。

お互ひに、吉田の事を心配しながら、美彌子の話に乗つてくれない義母が、何となくにくらしかつた。

須磨子の眼は、明るい部屋の中間に向けられてゐた。腫がるみ、現なく美しく見える須磨子が、美彌子には妬ましかつた。

美彌子は、ふと一人になりたくなつた。

『お母さま。私船田さんにお目にかかつて來たいの。此間中から電話二、三度下さつたの……お返事しなかりやならないこともあるの。』

と、云ふと須磨子は、信頼し切つてゐる妹の云ふことをでも聞くやうに、頭をいく度も動かした。

『御用ない……召し上りたいものがあれば買つて來るわ。』

『別に……郁郎さんにも、典子さんにもよろしくね。』

と、云つた。

美彌子は、尾張町から、少しはいつた所にある、ベイカリイで郁郎を待つてゐた。

家から、彼の勤先に電話して、彼の都合のいい時間を約束して、此處へ來たのだが、郁郎はまだ來てゐなかつた。

美彌子は、アイスクリームをスプーンで崩しながら、先刻の郁郎の喜びに溢れたやうな聲を思ひ出した。

美彌子は、郁郎と結婚することを、眞面目に考へ出してゐた。

何と云ふ馬鹿なことか、母が吉田を愛してゐることに気がつき、吉田と母とをむすびつけるやうに、進んで盡力するやうになつてから、美彌子は自分自身、吉田を深く思慕してゐることに気がついたのである。義母と共に、同じ人を思ひつづけてゐる空虚さは、たまらない事であつた。

自分の心の對手でもあるやうな須磨子と、朝夕顔を見合はしてゐることは、だんだん苦しくさへなつて來てゐた。

「お待たせしました。」

と、肩のところ、郁郎の聲を聞き、美彌子は、ピクリとなつて肩を上げた。

中世紀の騎士のやうに、どこか品のよい郁郎は、靜かに美彌子の前に腰をかけた。

彼は、自分の心を落着けるやうに、煙草に火を點じた。

「随分、暫らく……お母様、お風邪だからかがつてゐましたが、もうおよろしいでせうか。」と、云つた。

美彌子は、頭を振つて、

「母は、ずうと悪いんですの、單純な病氣ぢやありませんの。熱が、しつこくつづいてゐますの……」

「ああ、そりやいけないですねえ。」

「ええ。」

美彌子は、郁郎の善良な誠意に充ちた視線に合ふと、いつそ一氣に何もかも話して了ふ氣になつた。

「ですから、先達ての母へのお話は、駄目ですわ。」

「御尤もです。」

郁郎は、堅くなつて頭を上げた。

「私の方は……」

と、云つて、もう一度郁郎の顔を見た。すると、郁郎の顔の上に、吉田の面影が、生々しくふくれ上つて來た。

「……考へて居りますの。もう、少し考へさせて頂きたいんですの……」

さう云ふと、美彌子は赤くなつて、うつむいた。

郁郎には、勿論美彌子のさうした複雑な心の動きは分るわけはなかつた。が、美彌子が、はにかんだことや、ともかくも希望のもてる返事をしてくれたことで、自分の位置が、非常に、美彌子の近くに置かれてあるやうな氣がして樂しかった。

少くとも、美彌子は戀人がない、男性の中では自分が、結局美彌子に一番近い人なのだと思へたのである。

郁郎は、美彌子に對して、安心と親しみを感じながら云つた。

「お母様は、轉地でもなすつたらいかですか。」

「ええ。もう、少し熱が除れましたら、輕井澤に参りますの……來月の十日までには参りたいと思つてゐます。」

郁郎は急に顔を輝かせて、

「輕井澤ですか、僕の家も夏は輕井澤です。ぢや御一緒になれますね。妹は早く出かけるかも知れません。」

と、云つた。

美彌子は、典子と輕井澤で遊べることは楽しかつた。

現在のやうな、取り止めのない自分の心も、典子達と遊んでゐる内には、定りがつくのではないかと思ふのであつた。

コーヒーとお菓子とを喰べてから、郁郎と美彌子は、街頭へ出て、夕暮の散歩客に交じつて銀座を歩いた。

明るく暮れて行く空の色は、もう全く夏であつた。

郁郎は、だまつて歩いた。美彌子は、時々店々の飾窓をのぞき込みながら歩いた。果物屋の店先が、あまりに美しいので、美彌子は、じつと足を止めた。

「何かお買ひになりますか。」

郁郎が後から訊ねた。

「いいえ。あんまり、美しいから……」

と、美彌子は云つた。

川に沿つて右に曲つて、ビルディングの多い街に出た。

郁郎は、美彌子自分の好む通りに歩いてくれる従順さに、だんだん否まれては居ないと云ふ

自信を持つことが出来た。

自分をどの程度に愛してゐてくれるのか、確めて見たい氣がしたが、それよりも美彌子が、返事をしてくれるのを待つ方が、氣が樂だと思つた。

彼は、美彌子と一しよに歩くだけで、相當樂しかつた。

「幸町まで來ると、」

「日比谷公園を歩きませう。」

と、郁郎が誘つた。

美彌子は、微笑してうなづいた。

あんな手紙を出した後でも、自分を警戒せず一しよに公園を歩いてくれる、それは戀人待遇に
近いものだ、郁郎は思った。

公園の中は、若い二人連が多かつた。

水鳥の泳いでゐる池の傍の細道に出ると、美彌子はふと足を止めた。

「鶯鳥ですね。」

と、郁郎が、彼女の視線を辿つて、話しかけると、美彌子は、

「この夏中に、私の氣持定まると思ひますの……今、色々な事で、あやふやなんですの……もし
たら、お手紙のお返事するわ……」

と、さりげなく云つた。

「いいですとも。いいですとも。」

と、郁郎の顔には、明るい希望が溢れてゐた。

七月になると、別荘の管理を頼んである舊道の商人から、もうすつかり支度が出来てゐますと
云つて來た。

七月の十二、三日頃行くと返事を出すと、その日までの一週間ばかり、須磨子は、一日の中

きてゐる時間を、多くした。

大橋醫師は、轉地しても大丈夫だと云つてくれた。

須磨子は池田さんの肩を借りて、青芝の庭を久しぶりに歩いて見た。

「私、こんなに弱虫だったのかしら……」

と、情なさうに美彌子を振り返つて云つた。

二階の病室からは見えなかつた庭の片隅の梅の木は、もうびつしり青葉なのに、一枝だけに白

い返り花が、二三輪ついているのを見て、

「かへり花よ。池田さん、とつて頂戴！」

と、珍らしがつた。

「葉も二、三枚ね。」

「どうなさいますの？」

と、看護婦が訊いたが、

「いいの。」

と、須磨子は明るく首を振つた。

後から、ついて歩いてゐた美彌子は義母の若々しい優しい秘密を知つてゐた。四季咲の薔薇の一輪も、匂ひの高いくちなしも、須磨子は、吉田への手紙の中に入れてゐた。美彌子はその時家の中の女中から呼ばれた。

「お嬢さま、お客様でございます。」

「どなた？」

「あの藤村様の奥さまでいらつしやいます。」

と、女中が云つた。

「お通しして……」

と、云つてから、母を追ひかけて、藤村夫人の來訪を告げた。

藤村夫人は、座敷に通ると、庭にゐる須磨子に、

「まあ。お元氣なのね。」

と、聲をかけた。

「寢ていらつしやるのかと思つたわ。」

須磨子は、座敷へ歸つて來ると、

「私の病氣、何うして御存じ……」

と、云つた。

「それは、ちよつと云へないー」

と夫人は明るく笑つた。

看護婦が、須磨子のために、籐製の長椅子に、クッションを具合よく置いた。

「ようこそ。もう、二、三日で輕井澤へ行つてしまふところだつたの……」

「さうですつてね……」

「あら、そんな事まで、何うして？」

「完全にスパイ網を布いてあるのよ。ほほほ……」

と、藤村夫人は一人で樂しさに笑つてから、

「でも、いいわ。この程度の御病氣なら……」

と、しんみり云つた。

藤村夫人が、二時間位ゐたので、須磨子が疲れはせぬかと氣づかはれたが、藤村夫人の歸つた後の檢温も、別に昨日と變るところはなかつた。

藤村夫人が持つて来てくれた美しい剪花が青磁の瓶に入れられてゐるのを眺めながら、
「丈夫でお金のある人の話は、屈託がなくて、聞いてゐて楽しいわ。」

と、喜んでゐた。

看護婦が、食事に降りた後、美彌子だけが母の部屋に歸つてゐると、

「美彌子さん。」

と、義母は、一寸改まつて彼女を呼んだ。

「藤村さんは、船田さんの事で来て下さつたのよ。」

と、云つた。

美彌子は、さすがに緊張した。

「私の病氣の事、郁郎さんがお父さんに話したらしいのね。それで船田さんは、私への話は、向ふさまで、打ち切りたいと、おつしやるの……と、云ふよりもね。郁郎さんが、とても貴女を好きらしいのね。ぜひ、貴女と結婚したいと云ふ御希望なの……そして、お父様と私との話が圓滑に行かなかつた場合、そのあふりで郁郎さんと貴女とのお話までが、まづくなつたら困る……と、郁郎さんのお父さんが、お考へになつたらしいの。それで、御自分の事は、白紙にするか

ら、郁郎の方を頼むつて……藤村さんの所へ話が、あつたんですつて……」

「……………」

「物の解つたいいお父さんね。貴女は、どう……私、郁郎さんには、随分好感がもてるのだけ

ど……」

「……………」

義母が吉田と、むすびついた今、自分に濟まないと云ふ氣持から、郁郎と自分との問題に、前よりも積極的になつてゐるやうな感じがしたので、美彌子は、一寸ひねくれたやうな氣持になつて、素直に返事が出来なかつた。

「都合で養子に来て下さるらしいのよ……」

と、病んでから、いよいよ大きく水のやうにうるんでゐる眼を上眼づかひに美彌子を見た。

「嫌ひぢやないけど好きでもないの……だんだん好きになるかも知れないけど……嫌ひになるかも知れないわ。」

そんな云ひ方で、美彌子は、胸の中にあるモヤモヤしたものを洩した。

「むづかしいのね。」

須磨子は苦笑した。

「この間、郁郎さんにも云つたの……夏の終りまでに、お返事するつて……郁郎さん、週末にはきつと来るつて……。お交際すれば、どちらかに定るわ。」

「ア……」

須磨子は、一寸不安な眼をした。

「お母様、私のこと心配なならないでよ。私の事は、私にまかせてよ。」
と、美彌子は云つた。

軽井澤にて

軽井澤へ行く日は、須磨子はまるで病氣を忘れたやうであつた。

毎年の避暑に行くやうな氣持で、池田さんと云ふ新しい顔觸が居るのも楽しかつた。

舊道をゴルフ場の方にはいつた立花家の別荘は、建ててから二十年に近く古い上に、手狭でもあつたが、離山の見える落着いた家であつた。

隣は兩方とも外人で、右隣がパースウキックと云ふアメリカ人で、左隣がシルヴァンと云ふフ

フランス人であつた。

パースウキックさんは、親娘三人とも恐ろしい程背の高い家族であつた。

フランス人は、若い夫婦で、主人は語學の先生とかで、何時も夏を樂しげに暮してゐた。

ストッキングの爪先が、冷えるほど、冷めた空氣で、平家の四周から、光の入る座敷の眞中に立つて、なつかしさうに軒端近い離山を見てゐる須磨子は、汽車の疲勞が出たのか顔色が冴えなかつた。

「お母様お寒いのではない？」

と云ふと、

「いいえ。」

と、首を振つたが、美彌子は持つて來た毛糸編みのショールを、その肩にかけてやつた。

父が亡くなつてから、初めて來た別荘には、今更のやうに、父の思ひ出になる品物が眼についた。

美彌子には、ボンヤリしてゐる母の氣持が解るやうな氣がした。

結局、家中で風通しもよいが、陽當りもよいその座敷が、母の病室に當てられることになつ

た、蒲團が敷かれた。

「少し、おやすみにならないと……」

池田さんが云つた。

美彌子は、父が寢部屋に定めてゐた裏庭に面した六疊に引き上げた。

その庭には、とても大きい椎の樹が、風に揺られてゐた。

ほんの一尺ばかりの濡れ縁に、兩足を投げ出して柱に寄りながら、ボンヤリしてゐると、ふとその壁にかけてある父のスケッチが、眼に映つた。それは、十六、七の頃の美彌子と義母が、一しよに並んで立つた後姿である。美彌子は、まだお河童さんにしてゐる。自分の素足が、いかにもいたいたしげに中途で消えてゐる……。

母の撫で肩の線は、今と同じやうに、美しく流れてゐる……。あの頃は、義母たつて幸福だつたのだ……。自分も、物思ひなどと云ふことは、……などと考へて來ると美彌子は、この輕井澤にも、東京と同じやうに割り切れぬわびしさが、自分を待つてゐたことを知つた。

高原の夏の柔かい太陽は、日永一日、家中に溢れてゐて、ホコリは立たず、須磨子のために、本當によいやうに思つた。

來てから五日ばかり経つた土曜の午後だつた。

白く塗つた自轉車で、輕快なスポーツ・スーツを着た典子が、思ひがけなく訪ねて來た。テニスノの歸りらしく、ラケットを持つてゐた。

美彌子も、人なつかしい折だつたので、一しほ嬉しく、思はず手を取るやうにすると、典子は、

「こんなに近いとは思はなかつたの。私の所から直ぐよ。」

「貴女何日、いらつしたの……」

「二昨日……昨日から貴女のお家探してゐたの……」

「ムウ……」

二人は微笑を交はしてゐたが、典子は、

「今日、夕方の汽車で、兄が來ますの……迎へに行かうかと思つて……」
と、云つた。

「ぢやア直ぐね。私も一しよに參りますわ。」

美彌子も、何か浮々と答へた。

そして自分の自轉車を、玄關の三和土の上から降すと、そのまま典子の肩を押すやうに、前庭に廻り、母の病室の前まで来ると、

「お母さん。典子さん。」

と、云つた。

「まあ！」

縁側に、坐つてゐた須磨子も嬉しそうに云つた。

須磨子と典子とが、挨拶をしてゐる中へ、割つてゐるやうに、

「郁郎さんが、今日いらつしやるんですつて……典子さんと一しよに、驛までお迎へに行きます。」

と、義母に云ふと、美彌子は典子と、自轉車に乗り、蟻蛉のやうに、スイスイと街を降りて行つた。

乗降客の多い夕暮の驛の人混みの中に、小柄の外人のやうな郁郎が、銀座の有名なお菓子屋の、美しい包紙の買物を持つただけの輕装で、やつて来るのを見出した。

「やあ……」

と、彼は美彌子を見出すと、驚きと喜びに、表情を崩した。

「わざわざお迎ひ……ありがたう。お母様は……」

「大分いいんです。」

「それは、結構ですな。」

「兄さん、お寄りして、御挨拶していらつしやい。」

と、妹が云つた。

「どの邊！」

「とても近いの。マーケットの處を曲つて、ゴルフ場の方に行く間に、フランス人のお家あるでせう。始終、芝生でシリハムの遊んでゐる家知つてゐない。」

「知つてる……」

「あのお隣よ。」

「やう……」

「兄さん、自動車で、いらつしやい！ 私達後から追ひかけるわ。」と、典子が云つた。

美彌子も典子も、一生懸命にペダルを踏んだが、郁郎の乗つた自動車は、見る見る街角を曲つ

て見えなくなつた。

町にはもう燈火がついてゐた。

美彌子達が、軽く汗ばみながら自轉車から降りて、家にはいると郁郎は須磨子の部屋の廊下の藤椅子に腰をかけてゐた。

「此方に、ずつといらつしやいますの。」

と、云ふ須磨子の問ひに、

「いや、明日歸ります。八月になると、一週間位休暇がとれるのですが、それ以外は週末に來るだけです。」

「御勉強ですね。」

と、須磨子は、云つたが、相手をひやかしたやうに、とられはしないかと思つて、ピクツとした。

その傍で、美彌子と典子とは、勝手なおしやべりをしてゐた。

郁郎は、時々美彌子と視線が合つたが、美彌子のそれは明るくなめらかで、郁郎は美彌子に對し、いよいよ希望が持てるやうな氣がした。

兄妹は、とつぷりと暗くなるまで居て歸つた。

明日、典子がテニスのトーナメントに出るのを見物に行く約束をした。

兄妹を、家の入口まで送つて出ると、郵便受函に、東京から廻送になつた郵便物が、はいつてゐた。

中に、吉田からの軍事郵便が五通あつた。

それは、別々に出したものだらうが、輸送の關係で、一しよになつてしまつたのであつた。美

彌子には、二通のハガキで、須磨子には三通の書狀であつた。

美彌子には、いつもハガキで、須磨子には、いつも書狀であつた。

美彌子にくれたハガキの一つには、揚子江のスケッチが描いてあり、洲の上に水牛が、二つ遊んでゐた。

上陸最初の戦争が終りました。

江岸から、揚子江上を通るわが軍の艦船を砲撃してゐた敵を一掃しました。當分は、この地に滞在します。

今友軍の飛行機が、薄黄色の翼を大空にかがやかせながら、飛んで來ました。漢口爆撃から

の歸りでせうか。

ルビーの事が、まだ氣になつてゐます。

どうぞ、御身體を、大切に……。

もう一つのハガキは、小高い丘の上にある塔の傍に、日本の兵隊さんが歩哨に立つてゐる風景のスケッチだけで、文句は、何にも書いてなかつた。美彌子は、電家の娘として、晝は嫌ひでなかつたが、感情的の文句の少しもないハガキは、美彌子の心に、不思議な淋しさを起させるだけであつた。

母によこした三通の手紙の内容が知りたくてたまらなかつた。

翌日、十時頃、郁郎が典子のトーナメントを見に行くため、美彌子を迎へに来てくれた。

美彌子が、白地に黒い水玉模様をついたアフターヌーンを着て、郁郎と、一しよに出かけようとすると、須磨子が呼び止めて、

「すみません、歸りに、何處かの食料品屋へ寄つて、慰問袋に入れるやうなもの、買つて来てくれない……何かお豆の罐づめ……黒あめ、やうかん……ピツクルのびんづめ……サーデンなんかもいいわ……福神漬も……東京だと有名なお店のが買へるのだけれど……」

といつた。

それを聴くと、美彌子は、咄嗟に東京へ歸る口實が出来たやうな氣がした。

「いいわ。お母さま、私東京へ一度歸りたいの……だから、東京で買つてあげるわ。東京なら、お母さまのお好きな選擇が出来るでせう。一人ぢや、汽車が退屈だけれど、今夜郁郎さんがお歸りになると云つてらつしやるから、一しよに連れて行つて頂くわ。明後日位に歸つて來ます。」

と、美彌子が云つた。須磨子は、それを美彌子が、郁郎と一しよに行動したための、口實だと思つた。美彌子が、郁郎と接近してくれることは、須磨子にとつても、この場合一番望ましい事だつた。

「さう、貴女が東京へ行きたいのなら、さうして頂かうか。ぢや買つていただくもの、ノートに書いて置くわ。」

と、須磨子は、嬉しげであつた。

「ついでに、中へ入れるお手紙も、書いて置いて下さい。さうしたら、東京ですぐ出せるから……その方が、早く向ふへ着くわ。」

手紙と云はれると、須磨子はちよつと顔を赤めたが、素直に、

『ちつとして置きますせう。』

と云つた。

美彌子は明るい陽の下で、待つてゐた郁郎のところへ走つて行つた。一しよに歩きながら、
『今日、御一しよに東京へ参りますわ。母に買物を頼まれましたし私、東京へちよつと歸りたく
なつたの……』

『本當ですか。』

郁郎の顔は、爽やかな高原の陽の下に、忽ち光りかがやくやうに見えた。

『本當よ。』

『さう。それは、うれしいですな。』

と云つた。

その日一日中郁郎の感情は、もう愛人のそののやうに、美彌子の周囲をめぐり歩いた。美彌子
は、さうされれば、されるほど、人が取り返しのつかぬ事をしてつた後に感ずるあの後悔とも
淋しさともつかぬ、孤獨の氣持をしみじみと味ふのであつた。

郁郎と美彌子とが、夕方驛に行く頃から、夕立模様となり、列車に乗る時は、ホームの屋根と

列車の隙間から、飛沫を上げながら、雨が降り込んで来て、肩をぬらすほどの烈しい夕立であつ
た。

窓硝子を、雨がまるで洗ふやうに流れる中で、發車のベルが鳴つた。

『よかつたですね。もう少して、ずぶ濡れになるところ……』

と、郁郎が笑ひながら云つた。

大きな聲をしなければ聞えないので、美彌子は微笑んでうなづいた。

汽車は、トンネルを出たり入つたりしてゐた。

(くまのたひら)

と、云ふ驛を過ぎたとき、美彌子は須磨子から渡された手帖を、ちよつと見た。

一、クレパス(十二色) 小學生用にてよろし。

一、スケッチ帖一冊。BBB鉛筆十本。

一、寶來屋の黒豆、福神漬、とら屋のやうかん、黒あめ、山本のやきのり、白すぼし一袋。

一、今月の雑誌二、三冊(美術雑誌も一冊)

と書いてあつた。

クレパスやスケッチ帖などは、きつと吉田からの注文だらうと思つた。

吉田から義母への手紙は、外にどんな事が書いてあつたのだらうと思ふと、自分と吉田との距離が、無限に開いて来る反對に、義母と吉田とが、だんだん密接に結びついて行くのが感じられた。

義母が、考へた品物の外に、自分も何か吉田が、あつと云ふやうなものを思ひついて、鞆問袋の中に入れていたものだ、美彌子は考へてゐた。

「何を考へていらつしやるのですか。」

と、郁郎が顔をさしのべて訊ねた。

「別に……」

と云つたとき、列車は第十何番目の隧道をくぐつてゐた。隧道を出ると、郁郎が訊いた。

「明後日、お歸りになるんですつて……」

「ええ。」

「明日は、何をなさるのです。」

「別に、豫定はないの。でも、映画だけはぜひ見たいの……」

「ぢや、僕も御一緒に参つてもいいですか。」

「どうぞ。」

と、美彌子は云つた。が、すぐ郁郎と、こんなに親しくなつてもいいのかしら、郁郎は、結婚を目標とした眞面目な氣持で、自分に對してくれるのに、自分は、この頃の心のわびしさをまぎらすために、相手と實際つてゐても、いいのかしら……。これでは、人間同志として相手に對して、申し譯がないのではないかしらと、美彌子は思つた。

東京に着くと、もう九時過ぎであつた。

青山に歸る郁郎も、省線を利用するので、二人共省線のホームの方へ歩いて行つた。美彌子は東京に歸つて見ると、寂しいがホツと救はれたやうな氣持であつた。須磨子から離れて見ると、急にのびのびしたやうな樂な氣持であつた。

吉田の鬚影が、ひつそりと須磨子に、まつはりついてゐるのが、彼女を苦しめてゐるのだと思つた。

さうした苦しみを逃れ切れるには、須磨子から離れてゐることだが、それは現在の美彌子とし

て、堪へられることではなかつた。

佛教で、凡ての苦しきは、愛執から起るのだと説かれてゐるが、美彌子の苦しみも、吉田を愛し須磨子を愛することから、起つてゐるらしかつた。

須磨子の傍から離れて、しかも寂しくなく暮す道は、郁郎と結婚することだつたが、しかしそんな動機で、郁郎と結婚するのは、郁郎にすまないと思つた。

省線に乗り換へる人は、随分多かつた。

美彌子を、先にのせるために、身を退いた郁郎の手先は、何心なく美彌子の裸の腕に觸つた。

二人共、白く塗つた冷たい金物の棒につかまつて、身體の動搖をふせぎながら立つてゐた。

『明日、何時頃お目にかかれます？』

と、郁郎が訊いた。

『さうね。……お午頃から、お買物に出ますから、四時半頃尾張町の富士アイヌに居りませうか。』

『ぢや、僕は出来るだけ早く行つてゐます。』

郁郎は、もう心をさらけ出したやうな笑顏を見せてゐた。

郁郎は、美彌子の家の前まで送つて来てくれた。

『さよなら……』

と、握手も求めず、さらりと歸つて行く郁郎の善良さうな後姿に、

『ぢや、明日間違なくね。』

と、云はずにゐられなかつた。

郁郎の登音がなくなつてから、美彌子は門のベルを押しした。

白い浴衣姿のふみさんが、

『誰方ですか。』

と、植込の暗がりから、恐る恐る此方をすかして見た。

『私よ……』

『まあー お嬢さま。』

と、びつくりしてゐた。

ふみさんは、近在で百姓をしてゐる母を呼び寄せて、樂しげの留守居をしてゐた。

美彌子は、自分の部屋に床を取つて貰ひ、四肢をのびのびとさせた。

聞きなれてゐる時計が、リンロンと十一時を打つのを聞くと、氣持が落ちついて樂しかった。明後日歸るのを、二、三日延ばさうかしらとさへ思つた。

その翌日、美彌子は早目に、軽い晝食を取つて、家を出かけると、赤坂でやうかんを買ひ、銀座でスケッチ帖や鉛筆を買ひ、人形町まで行つてお豆を買つたり、熱い陽ざかりの町を歩き廻つた。

買物の包みが、片手では持ち切れないほどになつてしまつた。

一やつと、買物をすませて、約束の時間に富士アイスに行くと、眞白な服を着た郁郎が、待つてゐてくれた。二人で、お食事をしてから、帝劇へ行つて映畫を見た。郁郎は、美彌子がどんなに辭退しても聽かずに、美彌子の荷物を全部持つてくれた。

その晩も、郁郎は美彌子の家まで送つて来てくれた。別れるとき、輕井澤へ出立の時間を云ふと、驛まで送つて来ると云つた。美彌子が、いくら辭退しても聽かなかつた。

そのあくる朝、美彌子が慰問袋を作つてゐると、輕井澤から電話がかかり、池田さんが出て、大橋病院に寄つて薬を取つて来てくれるやうに、頼まれた。

「お母さま、何う？」

と、美彌子が、容體を訊くと、

「昨夜も一昨夜も、睡眠不足で困つて居りますの。」

と、云つた。美彌子は、急に母の事が、心配になり出した。

夕方上野驛へ行くと、郁郎は驛の入口の正面に、立つてゐた。

「到頭、送つて下さる……」

と、美彌子は笑ひながら云つた。

「暑いですね。」

「ええ。昨晚は……」

美彌子は、小さいハンケチで汗を拭つた。

眞白いパナマの帽子、ピンク色のドレス、汗ばんだ小麦色の腕や頬は、郁郎の眼には、親しくて健康さうな感じがした。

「今度の土曜日に、またお出かけになるのでせう。」

「ええ。」

「家へ遊びにいらしつてね。」

「ええ、伺ひますとも……」

美彌子のなつかしげな物云ひが、戀してゐる郁郎を有頂天にしてしまった。

ホームは、出征の勇士で混亂してゐた。美彌子の乗る汽車には小學校の先生らしい人が出征するので、可憐な生徒達の歌ふ出征賦が一しほ人の心を引きしめるやうに、ひびき渡つた。

二等車も満員であつた。

そして其處には、故郷の父母に守られて歸る勇士の御靈もあつて車内には肅然たる氣が溢れてゐた。

周囲の氣分に壓せられて、二人とも物を云はなかつた。

「これ、後で御覽下さい。」

と、郁郎は、チヨコレートらしい小箱と、もう一つ、小さい銀座で有名な金屬商の包み紙で包まれた小箱を美彌子に渡した。

最初の贈物であつた。美彌子は素直に受けとつた。

須磨子は、毎日日記のやうに、吉田へ手紙を書いてゐるらしかつた。

その手紙を出しに行くのは、池田さんの役であつた。

時折、手紙を書いてゐるところへ、美彌子がいいつて行くと、テレかくしのやうに、

「美彌子さんも、吉田さんにお手紙書かない？。一しよに出しませうよ。」と、云つた。

が、そんなとき美彌子は、何だか素直に書きたくなかつた。自分が、どんなに心をこめても、

母の手紙の持つたやうな感動を相手に、與へることが出来ないと思つたからだ。

吉田からの手紙は何日か三通、一しよに來た以來、杜絶えてゐた。

八月の十日頃になると、郁郎は休暇を取つて、輕井澤へ來ると、毎日のやうに、立花の別荘を

訪ねて來た。

親しさは、日に日に増し、遠慮は無くなつて行つた。

女中も、時々取次ぎをする池田さんも、船田兄妹の訪問は、一々取次がず、兄妹も、案内を待

たずに、庭先へ廻つたりした。そのために、夕方の散歩を誘ひに來た郁郎は、圖らずも、浴衣を

肩にかけたままで涼を取つてゐる湯上りの美彌子に、悲鳴を上げさせることもあつた。

須磨子も、氣分のすぐれてよい日は、朝夕の散歩に交じることあつた。

白麻の長襦袢が品よく透いて見える薄い紫の明石を着て潤澤な髪を無造作に束ねた須磨子の

美しきは、少しやつれたいたしい感じのために、かへつて物凄いいほど、水際立つてゐた。行きずりに、外人達は、美彌子や典子の近代的な少女美よりも、むしろ須磨子の日本婦人に特有な中年婦人の美しさに、眼をみはるのであつた。

八月の半を過ぎると、舊道の商店では、廉賣市を始めた。

洋服や、帽子や、靴や、レースや、食器類などが、格安な値段で賣られた。美彌子達は、それをひやかして歩くのが楽しみであつた。

郁郎は、美彌子に對して、いつまでも紳士的であつた。直接的には、手一つ握らうとはしなかつた。愛を語り合はうとしなかつたし、美彌子から愛情の證を求めようとしなかつた。

郁郎の父親も、輕井澤へ二度ばかり來た。須磨子と、あつた話のあつた後だし、遠慮して須磨子と會はうとはしなかつたが、來る度に美彌子を自家の別荘へ招待したり、グリーンホテルへ招待したりして、晩餐の御馳走をした。

さうして郁郎の美彌子に對する位置は、常人以外の人の眼からはまぎれもなく愛人の位置に坐つてゐた。

もう、美彌子の返事一つで、戰事は一擲千里に、進行するやうに見えた。

が、美彌子は、いくら郁郎と親しくなつても、その親しさは、容易に戀愛へは變つてゐなかつた。ある場合には、戀愛と單なる親しみとが、二つの平行線であるやうに。

その頃新聞に、ラデオに戰況ニュースは、段々活氣を呈してゐた。

皇軍が揚子江北岸の安慶を占領して以來揚子江沿岸の要地湖口九江を攻略して、蕭々として一路くさびのやうに、漢口へと喰ひ入つてゐるのであつた。

戰況が活潑になるにつれて、數多くの父母妻子は、親しき父、子、良人の武運長久を祈るのであつた。

須磨子も天下晴れてではなかつたが、彼女にとつて、又二人とはなき人の身の上に、思ひを走せてゐた。

が、吉田の消息は、すつかり杜絶えてしまつた。行動中で、郵便が出せないためであらうか。何時か一時に三通來たぎりである。

それも、二通は、スケッチが多く、文章はごく説明書のやうに、二三行書いてある丈だつたが、後の一通は、汚くよこれた書簡箋に、

空爆の音と砲聲とが一日中續きました。夜になると、やつと物音が杜絶え、やや西と覺しき

空に、十七夜ばかりの冴えた月が出てゐます（春日山おして下らせるこの月は妹が庭にもさや

けかりけり）と云ふ歌を、思ひ出しました。無気味なほど静かです。大きな蚊がワンワンと居ります。月を眺めてゐると東京のことが浮んで來ます。晝間砲聲を聞いてゐると、凡てを忘れて、ただ敵にのみ向ふのですが、月が冴えてゐるので、色々の思出が浮んで來るのです。

僕は、風邪一つ引きません。貴女は、御丈夫ですか。蒲郡で、咳をしてゐた貴女の蒼白い顔を思ひ出すと、貴女の御健康が、心配になることがあります。どうぞ、くれぐれもお身體を、大切に。

と書いてある。

須磨子はこの手紙をいく度讀み返したか分らない。眠れぬ夜も、晝静かな時にも、とり出して讀んだ。いく度も、開いたり折つたりするので、最初から弱つてゐる紙質は、ボロボロになりさうである。

夜など、この手紙を讀むと、それを胸の上に置いて、その上で兩手を組み、じつと彼の武運長久を祈つてゐた。

彼の屬する部隊名だけでも、戦況ニュースの中に出て來はしないかと新聞の戦争記事は、限な

く目を通したが、何處にも出てゐなかつた。

吉田からは、手紙が來ず、今書く手紙の返事が何日來るか分らず片便りのやうなもどかしさが

あつたが、それでも須磨子は、日に一通だけは必ず手紙を書いた。

それは、戦場で戦つてゐる人を愛してゐる女性にとつて、一つの義務だと思つたからである。

その手紙の中には、毎日の新聞の記事の中で、吉田が興味を持ちさうな記事の切抜きを必ず入れた。

吉田浩様

今日は、眞實の事を申しませうか。ほんたうは、あの時引いた風邪がなかなか直らず、それで氣分が秀れませんで、静養かたがた輕井澤へ參りましたのでなければ、貴君のお手紙

が、一日でも早く見られる東京に居りましたものを……。戦場で働いてゐる貴君の事を思へば勿體ないと思

ひながら、避暑地生活を致して居ります。散歩をしたり晝寝をしたり、これと云つて爲すこともなく日を送つて居ります。

輕井澤での一ヶ月は、夢のやうに經つてしまひました。

その一月の間激しい戦闘のニュースを讀みながら、貴君の部隊の位置をいろいろ想像して居ります。

貴君の身に、何か變事でもあれば、私に前以て、分るやうな氣が致します。最初の裡は、不安で神に祈りつづけてゐましたが、今では貴君の御武運を信じ、落着いて居ります。

立派に、御奉公をおつづけ下さいませ。

美彌子さんは、船田さんと云ふお金持の御兄妹とお知合になり、毎日樂しげに遊んで居ります。

お兄さんの方は、二十七、八、とても素直なよい青年紳士です。貴君が、御覽になつても美彌子さんに、ふさはしいと思ひになるでせう。美彌子さんを随分愛して居られます。

だが、美彌子さんの心は謎で、私にさへ一寸も分りません。二人の間は、このまま結婚するやうになつてもごく自然です。もし、結婚しなかつたら却つて、人の目をそば立てしめるかも分りません。

私はなるべく口出ししないやうに、美彌子さんの氣持次第にさせようと思つてゐます。

結婚問題や戀愛問題について、私より美彌子さんがずつと物がつつてゐるやうな氣さへいたしますから。

今日も美彌子さんは、船田さん御兄妹と鬼の擲出しへ行くと云つて午前中から出かけてました。

家の中は静かです。何もしないと、うつとりと死んでしまふやうな眠に、さそひ込まれます。

昨日は浅間の煙がよく見えました。一昨日慰問袋を差し出しましたが、内容は當地で買ひ集めましたものばかりですから、お氣に入らないかも知れません。東京へ歸りましたら、いろいろ考へて、めづらしいものをお送りいたします。

この花御存じでせう。りんだう。芝草、家の芝生の中に咲いてゐるのです。

美彌子は、吉田への手紙に書いたやうに、少し熱が下ると、全く快方に向つたやうに元氣に振舞つてゐるが、しかし病氣は美彌子の考へてゐるやうに、簡単ではなかつた。

井澤の夏も、漸く終りに近づくと、雨風の激しく過ぎた後には、青い栗のいがが落ちたり、すすきの穂先が赤らんだり、草に鳴く蟲に、秋は都會よりも早く感じられて、高原の明暮には人

の心を都へとせき立てるやうなわびしさで、つきまとひ始めた。

拾のほしいほど寒い日が、二、三日つづき、看護婦さんが風邪を引いた。すると、須磨子も、それに御相伴するやうに、發熱して、咳に苦しめられた。

大橋醫師から、呼吸器科のB博士が、夏中輕井澤に来てゐるから、病狀に變化でもあるときは、診て貰ひなさいと、紹介狀を貰つてゐたが、須磨子は診て貰はうともしなかつた。少しでも熱が下つたら、一日でも早く東京へ歸りたいと、云ひ出した。美彌子も、ポツポツ歸京の支度を始めてゐた。ただ、彼女は、輕井澤を去る前に一つ大切な責務が残つてゐた。それは郁郎の求婚に對して、黒白の返事をしなければならぬことであつた。

郁郎は、會社の休暇が済むと、東京へ引き上げて、週末だけ輕井澤へ来てゐたが、八月の第三土曜に來たときは、美彌子達も明日は、引き上げると云ふことになつてゐた。

日曜の午後美彌子がヴェランダの籐椅子で、硝子食器を荷造りしてゐると、珍らしく白飛白の上布を着た無帽の郁郎が現はれた。

「今日お歸り？」

と美彌子が訊くと、

「貴女方が明日お歸りになるのなら、僕も一日延して、一しよに歸らうかと思つてゐるのです。」

と、云つた。

「さう。それなら、私はうれしいけれど……會社の方大丈夫……」

「大丈夫です。」

「さう……お母さまが病人だし……女手ばかりをせう。郁郎さんが、一しよだと心丈夫だわ。」

美彌子は、お友達としての郁郎に、すつかり親しんでゐた。

郁郎は、暫くだまつて、美彌子の手元を見てゐたが、小さな聲で、

「あの……今日夕方御一しよに散歩して下さらない？」

と、云つた。

美彌子は、だまつてうなづいた。郁郎の、どこか改まつた調子から察して、今日こそ相手が一ヶ月近くも待つてくれた返事を求めるのであらうと思つた。美彌子は、郁郎の求婚を拒むべき、ハッキリした理由は一つもなかつた。それでゐて一生の大事をたつた一度で定めてしまふやうな、勇敢な情熱が湧いて來ないのであつた。

美彌子は、四時頃お湯から上つて、鏡の前に坐つたが、氣持の上では浮き立つて、お化粧をする氣にはなれなかつた。

紺地に大きくあやめをしぼつた浴衣に、博多の單帶をしめた。

夕方の空気が湯上りの肌にも、冷たかつた。

五時少し過ぎた頃、郁郎が迎へに來た。

美彌子は、ただ黙つて、郁郎の歩くのに従つた。

郁郎は、ゴルフ場の方へと歩いた。

道芝には、露が深かつた。

「御飯まだなんでせう。」

「ええ。」

ゴルフ場の横手に、東京から店を出してゐるすきやき屋の小舎風の食堂へはいつた。

食事を終へて外へ出ると、夕闇があたりをとどこめて、白い霧がフーフハと黒い木々の梢をかすめてゐた。

郁郎は御水端の方へ降りて行つた。

人影は、全くなく、四邊は夜になつてゐた。

郁郎は、まだ黙つて暗くて細い道をニューグランドの方へ歩いて行つた。

プールの脇に出たが、そこも人影がなかつた。

忘られたやうに置かれてあるベンチに郁郎は腰をおろした。美彌子も並んで腰をおろした。別

荘の灯がちらちら見え、静かな美しい晩であつた。

二人はしばらくの間、各自の氣分をまぎらすやうに、黙り合つてゐた。

やつと口を開いたのは、郁郎であつた。

「僕は、この夏はほんたうに楽しかつたのです。今迄の生活にない位楽しかつたのです。ただ、貴女がもつと具體的な約束をして下さらないために、時々いらした氣持になつたことがあります。』

と、云つた。

「すみません。」

美彌子も、ごく自然にさう云へた。

郁郎は、美彌子のやさしい返事にあわてながら、

「貴女に謝つて頂いたりすると、恐縮ですが……。本當は、貴女の氣持が、すっかり僕の方へ来て下さる迄、お待ちすればいいんですが……。でも、軽い意味でもいいから、もつと具體的なお約束をして下さると、どんなに安心するか、分らないのです……。』
と、云つた。

美彌子は、この夏の交際で、郁郎の善良な優しい性格が、分りすぎる位分つてゐた。

彼女ほ、郁郎の希望する通り、おぼろげでも結婚する約束を興へたかつた。が、自分の運命を郁郎の掌中に託してしまふのには、何か外の物に未練があつた。郁郎と結婚する以外に、何か自分に、もつと生甲斐のある世界があるやうに考へられるのであつた。

風が吹くと、わびしい落葉の音が、身の周囲に起るのだつた。

「美彌子さん、僕の氣持は分つて下さるでせうね。僕は、自分の氣持だけは、誰にも負けない純粋なものだと思つてゐるのですが……。』

と、郁郎は、感動を簡めて云つた。美彌子は、それはその通りだと思つたが、やはりだまつてゐた。

「美彌子さんー」

彼は、自分で勇氣のないことを叱咤するやうに云ふと、背後から何かに押されたやうに、思ひ切つて美彌子の手を把つた。

美彌子の手は、かすかに震へたが、そのまま彼に預けられた。

「何とか云つて下さいませんか……。』

「……………」

「黙つていらつしやることは、貴女を愛しつづけていい、貴女のお許しだと解釋してもいいでせうか……。』

美彌子の頭は、かすかながら肯定を現はしてうなづいたやうに見えた。つつましい愛人の動作が、郁郎をひどく感動させた。

彼の手は、そつと彼女の肩にかかり、美彌子がそれを許せば、抱き寄せたであらうが、そこまで行くまでに、美彌子はつと立つと、

「あちらへ行きませう……。』

と、さりげなく云ふと、小走りに走つて、下の道へ降りた。

彼女は泣いてゐた。この不思議な涙を郁郎に見せたくなかつた。

郁郎が、追いついて来るのを待つやうに、眼をこすり涙の跡を消すと、仄明るい外燈の下で、
郁郎に見せるために笑顔を作つてゐた。

霧だつた……濃く白く。しかし、それは眼で見る先きに、頬や眉にしつとり冷たく感じられ
た。

郁郎は、少し恨みをこめて云つた。

「何うなすつたんです？」

「どうもしないの……暗くて厭、彼處は……」

二人は、並んで歩き出した。

「僕は、貴女を愛しつづけてもいいんですね。結婚についても希望を持つてもいいんですね。」

郁郎の言葉は、美彌子からの否定を怖れるやうに、いんぎんであつた。

「……………」

美彌子は、何の角度から考へても、郁郎は好きであつた。自分に對する愛情も、その高雅な性
格も不足はなかつた。それでゐて、こんな場合、相手の胸中に飛び込んで行ける感情的なはずみ
が起つて來ないのであつた。

「でも、もしかしたら、貴女に外に愛していらつしやる人でもあるのでせうか……」

「いいえ……決して。」

それだけは、朗かに云つた。郁郎が、急に元氣を取り返したほどに……。

「私、もう少しで決心がつくわ……もう……ホンの少しで……」

美彌子は、つづけて云つた。

その言葉には十分美彌子の誠意が感ぜられたので、郁郎は、

「さうですか。」

と、素直に云つた。

「お母さまが御病氣でせう。だから、自分の結婚の事だけ、考へてゐられなかつたの……。だか
らもう少し落着いて、もう一寸考へたいの……」

まだ結婚問題など、眞劍には考へなくてもいい年頃の美彌子としては、少女らしい躊躇だと
思つた。

「いいですとも……ちや、お待ちします。」

「どうぞ……」

今度は何時迄待つと云ふ期限を切ることさへ出来なかつた。が、現在のやうな調子で、親しみの増して行くことは、單なる約束などよりも、もつと大事なことだと郁郎は考へた。

二人は、その時自動車の通る明るい道に出てゐた。

両側とも、うすぐらい樹木に包まれた別荘がつづいてゐた。

「貴女のお母さんは、僕について何う云ふ風に考へていらつしやいます？」

と、郁郎が云つた。

「貴君が大好きらしいわ。」

「……………」

美彌子の云ひ方が大膽だつたので、郁郎は三の句がつけなかつた。

二人は時を通る自動車のヘッドライトに、まばゆいほど照し出された。

郁郎は、美彌子に寄り添つて歩くことも出来なかつた。先刻、一度觸れることが出来た美彌子の柔かい手を取つて歩くことも出来なかつた。

「舊道もお名残りに、歩いて見たいわ。」

と、云ふので、郁郎はだんだん明るい街に出てしまつた。

「明日は、お手傳ひに行きますから、何でもおつしやつて下さい。」

と、云つた。

「私達のために、今日お歸りにならなかつたのね。」

「ええ。」

郁郎は笑つた。

「悪いわ。」

美彌子も、柔かな感情で云つた。

何となく郁郎にすまなく思つた。自分で企圖したわけでもないのに、優越な位置に立つて、郁郎を引っぱり廻してゐるやうに思へたからである。

しかし、かりして（すまない）と云ふ氣持が、重り合つて行けば、郁郎と結婚するやうになれるのではないかと思つた。

そして、その事は自分にとって、決して不幸なことではなく、義母をも喜ばすのではないかと思つた……………」

正しき嘘

東京では、まだ残暑がきびしかった。

東京に歸つてから、十五日ばかり経つて、須磨子の病勢は、枯野に火を放つたやうな猛烈な勢ひで、進行した。

大橋醫師は、病状に不審をいだいて、K大のBと云ふ博士を連れて来て對診した。

その結果は、腹膜炎を起してゐることが分つた。手足の腫れが、にはかに目立つのに、何となく腹部が、大きいやうに見えた。

病室には談話禁止と云ふ紙が貼られてゐたが、それは勵行されなかつた。

美しい人であり勝な氣の強さで、須磨子は、かかる重患をさへ輕んじてゐるやうだつた。

彼女はい前よりも、ずつと元氣のやうな表情をしてゐた。

九月の末から、十月の末にかけて、戦地の吉田からの手紙が、一度に五通ばかり届いた。關係で、一しよになつてしまつたのである。

須磨子は、讀んだり書いたりすることを禁ぜられてゐた。吉田の手紙も、三通ばかりは讀んだが、それ以上は眼がかすんで讀めなかつた。

美彌子が代つて、讀んでまかせた。

七月十六日から二十五日にかけて出して下さつた慰問品、手紙、新聞など、みな一しよに今日入手しました。今〇〇と云ふ街に宿まつて居ります。△△への長い行軍の始まる準備をして居ります。つい一昨日、激しい戦闘が終つたばかりなので、皆で散髪したり、前のクリ

クが、やや水がきれいなので、飛び込んで泳いでゐる者もゐます。一昨夜も、昨夜も上陸の難い月が出てゐました。早速スケッチ帖とクレパスを携へ散歩に出かけます。

クリークにつづく沼のやうな池のやうな水溜りに、これはかかつた舟が一艘ありました。先蹤隊の者が、その舟に乗つて、はやとふなの合の子のやうな魚を釣つて來ました。

そして、三枚のスケッチがある。魚の繪も描いてある。

その次ぎを讀まうとして、美彌子は急に、顔がカツカと熱くなつた。それは、義母の前で、鐵として口に出せないやうな、男性の愛情に充ちた文句であつた。

「お母さま、この次ぎは、後でお眼の疲れがとれたら御自身でお讀みになるといいわ。」

さう云ふと、美彌子は、吉田の手紙を母の胸の上にのせて、母の病室を急いで出た。

「ありがたう。」

母が、かすかな聲で呼びかけてゐた。

それでも、手紙を代讀するのはまだよかつたが、吉田宛の須磨子の手紙を代筆することは、美彌子にとつて、可なり大きい苦痛であつた。

須磨子は、最初看護婦の池田さんに書いて貰ふつもりだったが、池田さんは、看護婦として、何一つ缺點がなく、人柄もやさしかつたが、手蹟だけは、自分で恥ぢてゐるらしく、何うしても、須磨子のために、代筆しようとはしなかつた。

女中のふみさんも、決してみつともないほどの悪筆ではなかつたが、自分で書いた字を、主人に見られるのが、いかにも辛いらしく何うしても書かうとはしなかつた。

美彌子も、最初は斷つて見たが、母の氣持を察すると、斷り切れるものではなく、結局美彌子が代筆することになつた。

「私、自分で手紙を書かないわけを、何う云つて云ひわけしませうか。病氣のためなんて、何うしても云ひたくないの……。へうそと云つて指先が、わるくなる病氣があるでせう？ あれにし

と、須磨子が云つた。

「へうそなんて云ふと、却つて恐い病氣らしいぢやないの……。指先に、お怪我をしたと、云つたらどう……」

「でも、それぢや一度か二度しか云ひわけにならないでせう。だから、やつぱり軽いへうそと云ふことにして貰ひたいの……」

「いいわ。さう書くわ。」

美彌子は、母の病枕近く小机を寄せて、便箋と萬年筆を置いた。

須磨子は、じつと眼を閉ぢて考へてゐた。

自分の心の凡てを、美彌子の筆を通じて、相手に知らせることは出来なかつた。美彌子に知られても差し支へない範圍で、自分の想を少しでも、多く相手に傳へようとするのは、惱ましくもいらだたしい事だつた。

その惱みと、いらだたしさは、すぐ美彌子にも感ぜられた。何事をも、天真らんまんに、無氣にやつてのける美彌子も、この代筆だけは憂鬱になつてしまつた。

ただ、出来るだけ、自分の感情や理性をこころして、ただ萬年筆をうごかすロボットにならうと

努めた。

「お母さま、遠慮なしに、何でもおつしやつてね。」

と、云つた。

が、美彌子にそんな事を云はれると、却つて云ひにくくなつた須磨子は、うなづくやうに首をうごかしながら、

「ぢや、おねがひします。」

と、云つた。

(ぢや、お願ひします)

と、云つてからも須磨子は、容易に口をひらかなかつた。

美彌子にきかれてもいい言葉で、しかも自分で満足出来るやうな云ひ現はし方を、一心に考へてゐたのであらう。

「さうね。やゝばり初めに吉田様と書いて……」

美彌子は、だまつてさう書いた。

……駿山のお手紙一度に拜読しましたの……この一月ばかり、一通もお手紙が来ないので、

どう遊ばしたことかとても察して居りましたの……。

さう云つて、須磨子は、まただまつてしまつて、眼を閉ぢてじつと考へてゐたが、そのやるせなささうな悲しげな表情が、美彌子には、たまらなかつた。

美彌子は、母の顔から眼をそらして、二階のヴェランダの柱にのびてゐる葡萄の葉に眼をやつた。

……だから、お手紙を見た私の嬉しさはどんなでせう。どうぞ。お察し下さいませ……。

また其處で、須磨子は、だまつてしまつた。十分近く経つた。

「お母さま、どんどんおつしやつてよ。私聴いても聴かないつもりであるから、何でもおつしやつてよ。」

美彌子は、たまりかねて云つた。

須磨子のこの四、五日、白蠟のやうに蒼ざめた頬に、赤味がさし泣き笑ひのやうな微笑が浮んだ。

……私の手紙、今日からしばらくの間、美彌子さんに代筆して貰ふことになりました、一昨日、柄になく繻物を致してをりましたところ、はずみで右の親指に可なりふかく針の先を突

きさしましたの……。その後、心無くもお湯を使つたため化膿しましたので、お醫者に一寸切開して貰ひましたの……。四、五日の裡には、よくなると思ひますから、どうぞ御心配なく……。

身體の方はずいつとよくなりましたの……。東京へ歸りまして以來、食事も進みますの……

……。だから、私の事はどうぞ、御安心下さいませ……。

そこまで云つて、氣になるのか、細目に美彌子を見上げると、

『こんな嘘かいてわるいかしら。』

と、云つた。

『大丈夫だわ。お母様は、もう一月もすれば、きつとよくなるわ。よくなれば、嘘が嘘にならな

くてもすむわ。戰場にゐる吉田さんに餘計な心配をかけるのはよくないわ。』

美彌子は、母を働はつて云つた。

『私もさう思ふの。』

須磨子は、ホツとしたやうに云つた。

十月の末になると、須磨子の病勢は、だんだん進んで行つた。腹膜炎の方が、殊にいけなかつ

た。

その上、十一月の初に、須磨子は風邪を引いた。それは、いよいよ彼女を死地に追ひやるやう

なものであつた。

家中、濕布ぐすりの匂が立ちこめた。

感冒はどうにか癒つたが、身體はすっかり衰弱して、大橋醫師も首をかしげるやうになつた。

病人だけが癒ると云ふ自信を持つてゐた。

美彌子は、薄命な母を、どうにかして助けたいと思ひ、寢食を忘れて、看病に手をつくした。

看護婦を二人にしたが、美彌子も夜中起きてゐて母の病床に付き添つてゐることもあつた。

須磨子は、いろいろな禁制が解かれ、何でもしてもいい事になつてゐた。須磨子はそれを病勢

が恢復したためだと解して悦んでゐたが、本當はその逆であつた。

郁郎は、よく見舞に来てくれた。そして、男手のない家庭に對して實際の用にも役立つてくれ

た。

須磨子が、小康を保つてゐたある日に、美彌子は郁郎と一しよに久しぶりに銀座へ出て買物を

した。それから、ニユース劇場をのぞいたりして歸つて來ると、池田さんが、

「今日は、怪談のやうな事がございましたのよ。」
と、呼吸をひそめて美彌子に云つた。

「何うしたの？」

と、美彌子も、眞鍮な顔になつて訊き返すと、

「今日、奥様が三時頃に、手紙が來てゐるから、取つて來てくれとおつしやいますの……ところ
が、いつも二時過ぎに郵便が來るものですから、私はいつも二時半頃に郵便受函を見に參ります
の。今日も、見に行つたばかりですから、(先刻見に行つたばかりですの)と申し上げましたら
(でも見に行つてくれ、何だか來てゐるやうな氣がする)と、おつしやいます。御病人のお淋し
さからだらうと思ひ、御門まで參りましたら、何うでせう。ちゃんと、吉田さんからのお手紙
が、はいつてゐるぢやありませんか。私びつくりしてしまいましたの……」

「まあー」

「しかも、その郵便は、二時の配達が遅れたのぢやないの……。私が、お讀みしてさしあげたら、
南京へ行く戦友があるの、航空便にすると云ふことが書いてありますの……。航空便ですから、
東京へ着いてから、別配達で來たのぢやないでせうか。」

「……………」
美彌子も、不氣味になつてだまつてしまった。

母の病室にはいつて、母のそそり立つやうな鼻、こけ落ちた頬、じつと閉ぢてゐる眼などを見

てみると、もう魂だけが千里の海山を越えて、吉田の所へ通つてゐるやうな氣がした。

須磨子の身體は、蠟燭の燃えつきるやうに、だんだん頼みすくなくなつて行つた。

ある日、診斷に來た大橋醫師は、歸りぎはに、

「お嬢さま。一寸。」と、云つて美彌子を、玄關脇の應接室に呼ぶと、

「何ともお氣の毒ですが、お正月迄むづかしいのではないかと思ひますが……」
と、云つた。

「……………」

美彌子も七、八分諦めてゐたが、醫師にからまで、ハッキリ宣告されると胸がつまつて何にも
云へなかつた。

「お母さまが、亡くなられた後では、困るやうな事がありましたら、今の内に手續をなすつて置
いた方がいいのではありませんか。」

と、醫師が云つてくれた。

『……………』

美彌子は、だまつてうなづいたが、母の死後の準備などして置くやうな氣持は少しも起らなかつた。

美彌子の氣力があまりにも甚だしいので、手持無沙汰である大橋醫師に、美彌子は、『ありがたうございます。』

と、雄々しく答へると、立ち上つて大橋醫師を效關に送り出して行つた。

母の病室に引き返して母の顔を見ることがたまらないほど悲しかった。と云つて一刻も、自分の部屋などには引き込んでほられない氣持だつた。

暗然とした氣持で母の枕元に坐つてみると、女中が吉田からの手紙を持つて來た。

敏感な病人は氣配でそれを察すると、今迄つむつてゐた眼を開けて、手紙を開封する美彌子の手を見つめてゐた。

その手紙は、いつになく戦場の血なまぐさい空気を傳へたものだつた。

須磨子様

この部落の栗は、小さくてとても美味しいので、澤山ひろつて、ゆでて喰べました。

十日位前から、それはそれは寒くて、もう大分雨が降らないので、風邪引きが多くて困つてゐます。わが隊の繁野上等兵は、四、五日前肺炎のため後送されましたが、本日死亡の通知が來ましたので、皆暗然となつてしまひました。今日、彼の寫眞をかざり、山栗や野菊を供へて、皆で冥福を祈りました。

昨日わが隊の杉村と云ふ上等兵が宿舎近くの田圃で地雷にかかり、幸ひ杉村君は破片傷で、濟みましたが、馬は可哀想に即死してしまひました。

病人には、刺戟が強すぎると思つたが、須磨子が、懸命な瞳で見上げてゐるので、その次ぎを讀まざるにはゐられなかつた。

……昨日夕刻、宿舎附近の小山にカラスのやうな鳥が、澤山とまつて鳴いてゐるので、足もとに氣をつけて行つて見ると、到る處に壕がつづいてゐました。ここは、友軍の歩兵が、奮戦したところで、敵の死屍が、思はず面をそむけたいほど、澤山ころがつてゐました。

(須磨子の顔は、見る見るくもつてしまつた。その次ぎに、死屍を形容した文章が、二、三行あつたが、美彌子は讀まなかつた)

宿營地に歸つて見ると、郵便が届いて居て、皆大悦びでした。貴女のお出し下さった慰問袋も三個、名古屋の小さい煙からの手紙その他。

指先を負傷なすつたんですつてー さう云ふ小さい負傷からも、たいへんな事になる場合もありますから、出来るだけの手当をなさるやう、お願いして置きます。

お身體の方は、ずつとよくなつたとの事、何よりもうれしいおたよりでした。私もだんだん敵の彈丸に馴れて來ました。三日前の戦闘では、敵の砲撃や迫撃砲撃が、何十發も陣地近くに落ちましたが、なかなか當るものではありません。二、三度砂けむりと小石とを頭から、被ぶつただけです。すつかり、自信がつかしました。

美彌子さんのおたよりがないので、淋しく思つてゐます。お母さまの代筆ばかりでなく、御自身のおたよりも下さい。皆様くれぐれもお身體をお大事に。

十月二十八日

須磨子は、手紙が讀まれてしまふと、ガツクリとしたやうに、眼を閉ぢたが、そのまま何にも云はなかつた。

「二、三日の中に、お正月のおもちを早くついて、送つてあげたいわ。今頃、送らないと、お正月

用込に届かないわ。」

美彌子は、母をなぐさめて云つた。

「やうね。」

須磨子は、かすかに答へた。

「おとそも……それから。ごまめも送つて上げるといいわ。」

美彌子は、つづけて云つた。

母は、蒼白い頬をかすかに、ふるはせてゐたが……。

「吉田さんは、なかなか戦死なんかなさらないわ……ただわたしの方が、お正月迄生きてゐられない氣がするわ。厭だなア死ぬのは……」

と、須磨子は細い腕で蒲團をはねのけた。

「そんな氣の弱い事、おつしやつちやいやよ。」

と、美彌子は必死になつて云ひ返したが、勝氣な母が初めて洩した弱音だけに、美彌子の胸に

も、抗しがたい強さで、ひびいて來た。

十二月の半になると、須磨子の容體は悪くなるばかりであつた。

意識がハッキリしてゐるときは驚くべきほど、ハッキリしてゐたが、發熱したときは、意識が
こんだくした。

スヤスヤ眠つてゐるかと思ふと不意に半醒状態になり、

「ああ、うるさい！」

ときびしく、誰かを叱つて見たり、瘦せた右手の指先で、空間に字をかきつづけたりした。

顔は、いよいよ蒼ざめて、能面のやうに物凄かつた。

でも、吉田からの手紙が來るとその瘦せた顔にも、喜色がただよひ、吉田の手紙を開封もせ
ず、長い間胸の上のせてゐた。

そして、二時間も三時間もかかつて、よわくなつた視力を、緊張させてよみつづけるのであつ
た。

時々、

「ゼリーが喰べたい。」とか、

「マスカットが喰べたい！」

などと云ふが、喰べると直ぐもどして苦しんだ。

十二月二十日過ぎの雪の降つた日であつた。雪に明るい部屋に、美彌子が朝から、坐りつづけ
てゐると、十一時頃になつて、須磨子が吉田に手紙を書くと言ひ出した。

十二月にはいつてからも、美彌子は義母のために、三度ばかり代筆したが、義母はもう手紙の
言葉を考へ出す力がなく、

(どうぞ、お身體を大切に……)

と云ふ文句が、手紙の中にかく度も出て來たり、指先にあることになつてゐる傷のことを、二
度も三度も云ひわけしたり、しどろもどろの文句がつづくので、美彌子は、それらの重複を避け
て、母の氣持だけを、文章にしたが、さうなるといつも同じやうな手紙の文句になつて、吉田が
疑ひやしないかと、心配になつて來たのである。

今日も、その悲しい仕事をしなければならぬかと、美彌子は重くるしい胸を懷いて、母の枕元
に小机を持ち出した。

「いつもの通り吉田様と書いて！」

母の言葉は、いつになくしつかりしてゐた。

今迄の……私の嘘を……どうぞおゆるし下さいませ。……私は、どんなに悲しくつても……

本當のことを申さねばなりません……。だつて、私はもう間もなく、嘘をつくことが出来な
くになりますから……。

須磨子は、これだけのことを、苦しげな呼吸づかひで、切々に云つた。

美彌子は、母の言葉を聞いてゐる裡に、母が吉田に對する最後の手紙を書いてゐるのだと氣が
つくと、頭から冷水を浴びせられたやうな嚴肅な氣持になり、胸がつぶれ、手がふるへて、眼頭
があつくなり、溢れて来る涙が書簡箋の上に落ちようとするのを、危く片手で拭つた。

……私は、本當は夏からずつと、わづらひつづけてゐるのです。胸がわるい上に、餘病を出
したのです。

……貴君の御出征中に、死んで行くことは、残念で残念でなりません。

……貴君は、あの時（貴女が、私を愛して下さる限り、安心して戦へます。生きても死んで
も、貴女から愛せられてゐると云ふ自覺は、僕をどんなに勇氣づけるか分りません。どう
ぞ、僕のために、お身體を大事にして下さい）と、云つて下さいました。……それなのに、
私が……。

須磨子は、其處まで云つて、呼吸がつづかないらしく、言葉を切ると、苦しげに呼吸をはずま

せてゐた。

（お母様、そんなに弱氣な事を、おつしやつちや……）

と、美彌子は、よほど抗議したかつたが、これは義母の一生の中で、一番大事な手紙かも知れ
ぬと思つたのでだまつて書きつづけた。

十分間近くも、須磨子は、眼を閉ぢてだまつてゐた。

やつと眼を開けると、

『今まで書いたこと忘れたわ、それ見せて……』

と、云つた。

美彌子は、書きかけの書簡箋を母の顔の上にかざしてやつた。

須磨子は、瘦せた右の手を、それに持ち添へて、讀んでゐたが、それを美彌子に返すと、

……それなのに私が……臍甲斐なく死んで行くことは、ほんたうに申しわけがございませ
ん。……でも、貴君のおかげで、私は満足して死んで行けます。……貴君から、こんなにも
愛されて死んで行くことは、女性として幸福だと思ひます。貴君が、いつかおつしやつたや
うに、私達の愛は、時間も距離も、生死も、その他あらゆるものを超越して結び合つてゐるや

うな気がいたします。……だって、私は眼を閉じれば、すぐ戦場にある勇ましい貴君のお姿が、眼にうかぶんですもの……。私は、今死んでも、きつと貴方を愛しつづけられるやうな気がいたします。生死を越えて、私は貴君を愛することが出来ると思ひます。

だから、どうぞ私の死を悲しまないで頂きたいと思ひます。
其處まで云ふと、須磨子は、心の中の最も大切な事を吐き出したやうに、グツタリとなつてしまつた。

美彌子も、あまり緊張した爲に、心と神経とが疲れ、義母がだまつてしまふと、自分も机の上
に顔を伏せて、左の手で両方の眼から、溢れようとする涙を押へてゐた。

すると、須磨子は、ふと語調を變へて、

「ねえ美彌子さん！」

と、呼びかけて來た。

「なあに、お母さま。」

と、美彌子が、涙を拭きながら云ふと、

「私が、これからいふこと、貴女だまつて書いて下さる？」

と云つた。

「ええ書きますとも……」

と、須磨子は、顎をかるくうごかして肯いた後、またしばらく眼を閉ぢてゐたが、やつと思ひ切つたやうに、

「ちや……手紙のつづき。」と、云つた。

私が死んで行くについて、一番心残りなのは、美彌子の事でございます。美彌子は貴君との話が破れた後、この前お話ししたやうな立派な求婚者があるのに拘はらず……ちよつとも、結婚する意志がないやうに見えるのです……。

其處迄云つて、須磨子は、苦しい呼吸づかひを、自分でやつと鎮めると、

……私、この頃から思ひますの……貴君が、歸還なすつたとき私の代りに美彌子と結婚して下さつたら、貴君も美彌子も、幸福になれるのではないかと……これは、随分自分勝手なこと

とですが……。

先刻から美彌子のペンは急に止まつて、母の唇から出る言葉の幾つかを、紙上にうつさなくなつてゐたが、須磨子が後の言葉を考へようと、じつと黙つた時、

「厭ですわ。お母さま、私そんな事はかけません。そんな事、私の意志ぢやないんですもの。私、お母さまの愛してゐた人となんか、結婚出来ませんわ。」

彼女は、涙聲で身もだえしながら云つた。

須磨子は、それぎり何も云はなくなた。

美彌子は、病人に對して、強い言葉を云ひすぎたと後悔しながら、須磨子の表情を見たが、須磨子の表情は、先刻と少しも違はなかつた。

そののみか、美彌子を間誤つかせるやうな微笑をふくんだ顔で、美彌子を見上げるのであつた。

美彌子は、それに力を得て、

「お母さまは、私の事なんか考へて下さらなくつてもいいわ。お氣持を眞直ぐに、押し通して貰ひたいわ……。私の事なんか……」

「さう……」

と、須磨子の聲が溜息のやうに洩れて、首は窓の方に向けられた。

「かして……」

と、書齋の扉に、須磨子のやせ細つた手がのびて、それを自分の胸の上にのせると、わづかに残つた力で、それを千々に引きさいてしまつた。

須磨子は、手紙を破つてしまふと、疲れ切つたやうに、兩眼を閉ぢてしまつた。

美彌子は母を正視してゐるのに堪へなかつた。肉體は既に盡きんとして、精神のみが生き残つてゐるやうな義母から、自分の心の底の底を見透かされてゐるやうな寒氣立つ思ひがした。

美彌子は熱い頬を押へると、のがれるやうに須磨子の病室を出た。

その日から須磨子は、吉田に手紙を書かうとはしなかつた。

もう、今年が一週間とは残つてゐない頃、須磨子の病苦は頂點に達してゐた。美彌子は、母のうめき聲になやまされつづけた。

その日は、とりわけ暗いみじめな日であつた。午後二時頃こんこんと眠つてゐた須磨子は突

然、

「大變よ！ 吉田さん！ 危い、駄目よ、駄目よ。」

と、大きい聲で叫ぶと、恐ろしさうに眼を開けて、周囲を見廻した。

凄まじい叫び聲であつたので、階下にゐた美彌子も、時を移さず、病室にかけつけた。

「お母さま、夢を御覽になつたのでせう！」

と、美彌子が云つた。

「ああ、恐ろしかった……」

と、まだ動かぬ瞳を見開いたままであつた。

「手をかして下さい。右を下にして見たいから……」

と、美彌子に云つた。

池田さんが、頭の方に廻り、美彌子が、足の方を持つのだつたが、そつとしてゐるのに須磨子

は、

「痛い！ 痛い！」

と、悲鳴を上げた。

もう、身體はうごかせないのであつた。

「ねえ、美彌子さん！」

と、須磨子は力一杯に、眼を開いた。

「なあに……」

美彌子は、母の顔近く取を寄せた。

「私が死んでも、當分私の名で吉田さんにお手紙かいて……」

「……………」

母の最後の手紙を破らせてしまつた美彌子は、それに抗議することが出来なかつた。

「吉田さんのために、當分生きてゐることになつてゐたいの……。今まで通り、私は生きてゐて

貴女が代筆してゐることにして貰ひたいの……ねえ、お願ひ……」

「……………」

それを拒めば、母の死を自分が、吉田に知らせなければならぬ。と、云つて、吉田にそんな

にまで、大きい嘘をつくことは、いやだつた。

「ねえ……でないと、私死ねないわ。吉田さんに、すまなくなつて……」

「だつてお母様……」

「いいわ。たとひ本當のことが分つても、吉田さんは、きつと貴女や私を恨まないと思ふわ……」

「……………」

美彌子は頭が混亂して、考へられなくなつてしまつた。

危篤と云ふ報せに、須磨子の實家の方の親族は代り合つて別れに來た。

兄は、毎日のやうに顔を見せてゐたし、須磨子の伯母に當る人も二、三日隔きには來た。

誰が來ても、須磨子は苦痛一つ訴へず、相手にふさはしい挨拶をするのだつた。

郁郎が父と共に、見舞に來てくれた。

船田氏は、さながら、既に幽鬼に招かれてゐるやうな須磨子を長くは見てゐられず、數分して

座を立ち、美彌子の心勞をいたはつて歸つて行つた。

病室に、彼等親子が残して行つた見事な花籠と果物を、新しく來た看護婦と池田さんが、興

しい美しいと云ひ合つてゐると、須磨子は突然、

「うるさいわー」

と、怒鳴り、あとはキョトンとしてゐた。

部屋が、シーンとしてゐる時には、幻影が浮かぶらしく、

「いけませんよ。そんな處に立つては……」

と、不意に云つたりした。そんな時は、ポツカリ眼を開けてゐるから、夢ではないらしく、看護婦は、ちりげ寒いやうな表情をした。

もう三日で正月と云ふ日、朝まで降つてゐた雨が上り、午後からカランと晴れた多の日だつた。

美彌子が病室に行くと、須磨子は、綺麗なコンパクトを持つて、ちつと自分の顔を映してゐ

た。

美彌子が傍に坐つても、美彌子にかかはりなく、瘦せた手で、化粧を始めた。口紅が唇を彩

どると、血の氣の失せた頬がいと蒼ざめ、美彌子は「凄いなア」と思つた。

看護婦達は、大病人のおしやれを、目を交して悲しげに笑つてゐたが、須磨子は、やがてすま

して美彌子と呼ぶと、

「一しよに、お紅茶を飲みませう。レモンを入れて……」

と、云つた。

看護婦に紅茶を命じながら、

「美彌子さんの分もよ。」

と、ハッキリ念を押した。

やがて、紅茶が運ばれると、須磨子は起き上るやうな姿勢をした。

美彌子が幼児に與へるやうに、スプーンにすくつて、熱をさまして、その唇元に運んだ。

一口は、うまさうに咽喉を通つた。二度目が咳をさそつて、見てゐても氣の毒なほど苦しんだ。それから、急に容體が變つた。

美彌子が、大橋醫師に電話をかけたが、なかなか出なかつた。

電話が通じると、もう毎日の往診で、そちらへ出かけたから、そちらへ着く時分だと云ふの

で、ホツとして病室にもどつた。すると、もう須磨子は引く息ばかりであつた。

家の附近を通る豆腐屋の振鈴を切なくいらだたく聞きながら、美彌子は、醫者の來るのを一心に待つた。

須磨子のなき骸は、一日隔いて茶毘に附された。

美彌子は、母の柩の中に、その臨終の日まで枕元に置かれてゐた文箱の中にあつた吉田からの手紙を、全部入れた。

それから、母が愛用してゐた化粧道具とお人形と、平素樂しみにしてゐた美術雜誌が、折柄届けられたのも入れた。

柩の釘が、兄なる人の手に依つて打たれる音を、美彌子は涙の中に、耳をふさがずにはゐられなかつた。

自分と共に、紅茶を飲んで死んで行つた祖母の氣持を思ふと、美彌子は止め度もなく涙が出るのであつた。

吉田を愛してゐた須磨子は無く、母として姉として彼女を愛してゐてくれたかけ換のない女性の死が、深く美彌子を悲しめるのであつた。

葬儀は、父の名もあつて、可なり多くの參會者もあつた。

須磨子の死の前後から葬儀にかけて、郁郎は毎日朝早くから立花家へ來て、何くれとなく世話をやいてくれた。

須磨子の兄と相談して、いろいろな事の處理に當つてくれた。

須磨子の兄は、郁郎を美彌子の婚約者のやうに大事に扱つてゐた。

初七日の佛事も済んだ。

十日過ぎ十五日過ぎた。だんだん落着いて來るにつけ、これから何うして行かうかと考へると、美彌子は途方に暮れることばかりであつた。

須磨子の兄は、一度落着いて食事を一しよにしようと思つてゐた。それは、郁郎との事らしく、郁郎を立花家に迎へて、美彌子の氣持を安定させたいと思つてゐるらしかった。

美彌子にも、今更異存はないのだが、それでゐて、一日延ばしに延ばして置きたいのだつた。それよりも、彼女にもつと重大な問題が残されてゐた。

母の死について、吉田に對して取るべき彼女の態度であつた。思ひ切つて知らせるべきか、母が云つたやうに、今暫らく代筆の手紙を書かうか。母の死を自分が知らせなくつても、きつと吉田の友人の誰かが知らせるだらうし、やつぱり自分の手で知らせようか。

五日経つても決心がつかず、一週間経つても決心がつかず、十日経つても思ひ切つてゐた。美彌子には、堪へきれない重荷になつてしまつた。

恰度三七日忌の夜であつた。

今日こそはと決心して吉田に書くべき便箋を擲けてゐると、女中が須磨子宛の手紙を持つて來た。

吉田に取つて、須磨子はまだ生きてゐるのだつた。

「讀まうか、讀むまいか」と、ためらひながら、封を切る美彌子の手先は、わなわなとふるへて

ゐた。

遺された嘘

美彌子は、結局思ひ切つて恐る恐る吉田の手紙を讀んで行つた。

須磨子さま

寒くて寝つかれない夜が続いてゐます。眠つたかと思ふと、きつと夢を見ます。昨夜、夜明け方の夢に、スキートビイの咲いてゐる花園に入り、何だ寒いと思つてゐたのは、夢だつたのか、こんな花が咲いてゐると思ひながら、歩いてゐると、貴女が向うから來てそれはそれはやつれてゐるのです。僕が驚くと貴女は笑つて足を見せた。すると、その足がペリカンのくちばしのやうに皮が白くたるんでゐて、僕はゾツとしました。近よらうとすると、僕と貴女との間に、とても深いクリークが出來てゐるのです。それを飛び越さうとすると、眼が覺めました。いやな夢でした……。氣がつくと、僕の胸の上に、牝鷄がのつて眠つてゐるのです。これは、隣で飼つてゐる鷄なのですが、可笑しな奴で、よく誰かの寢床に上つて渡るのです。此奴のせゐだつたのかと腹が立ちましたが、追ふ氣にもなれず、ボンヤリ眼を開け

てみると、だんだん夢が氣になりました。

指の傷と云ふのも、何だか本當に出来ないやうな氣がして來ました。

貴女は、本當に御健康なのでせうか。もしか、お身體がわるく、手紙が書けないのではないでせうか。

内地からの便りは、僕達の血を増すやうなものです。内地からの手紙を讀んだ兵隊達の晴やかな顔付は、内地にゐる人達の到底想像出来ないものです。

家郷なく、愛する者のない男の方が、死を安らかに思へるでせうか。左にあらず、愛する者を持ち、心の據りどころあつて、初めて生にも死にも、安心出来るものと、しみじみ知らされてゐます。指の傷がお臍りにならなくつても、どんな曲つた字でもいいですから、御自身の手で書いたお手紙がほしいと思ひます。

今日にも明日にも出勤命令が下るかも知れません。早く手紙を下さらないと、お手紙を受け取るのが、更に更に遅くなるかも知れません。

美彌子は、其處まで讀んで來ると、自分でも何うしていいのか分らなくなつてしまつた。

母の自筆の手紙をほしいと云ふ吉田に、何うして自分の手で、母の死の報せを書くことが出來

ようか。たとひ第三者の手に依つて、間もなく母の死が知らされようとも、美彌子は自敷の手に依つては、こんな悲しい手紙は絶対に書けないと思つた。

それだけではない、生死の境に立つて、母の事を案じてゐる吉田に、母が残して死んだ嘘を守りつづけるのが、自分として正しい道ではないかと思つた。それが亡き母を慰め、御國のために戦つてゐる吉田をも、いたはる道ではないかと思つた。

美彌子は、吉田の手紙を机の上に置くと、まだ母の生前のまま、少しも手をつけてない母の居間にはいり、母の用筆筒の引き出しを開けて、母のメモや、母の小遣帳などを取り出すと、それを自分の部屋に持つて來て、一生懸命に母の筆蹟を眞似る稽古をした。

美彌子の字も、現代の女學校卒業生のレベルよりは遙かに美しかつた。が、須磨子の字は、線がずうつと細く、優艶な趣きのある、須磨子その人を思はせるやうな字であつた。

美彌子は、母の字の特徴を、いろいろに眞似て見た。その日一杯、自分を忘れて稽古した。夕方が來て、灯がついてから、やつと書簡袋を取り出した。字だけを眞似ることを考へてゐたが、母のやうな文章が書けるかと思ふと、また、不安になり憂鬱になつた。

吉田様

おたより只今拜見……申請ないことばかりでございませぬ。指の傷一度なほりかけたのです
が、またへうそになり、とても痛み、手指でする仕事は何も出来ませんでしたの……。
御頭、母の云つた通り、へうそにしてしまつた。

あんなにも、御心勞をかけて、ほんたうに申謝ございませぬ。まだ、人指し指は使へませぬ
が、自分で書いて見ます。とても、私の字のやうではいませぬ。御判讀下さいませ。
東京も、二月にはいつてからは、とても懇うございませぬが、戦場の寒さとくらべては、何で
もございませぬ。

さう書くともう、何も書くことがなかつた。

が、その後へ、義母の口述筆記をした時のやうに、家の庭の事をかいたり、ルビーの事を書い
たり、東京での社會的な事件のことを書いたりした……そして、新聞の切抜きを入れ、水仙の花
を一片入れた。

美彌子は、それを郵便局へ出しに行くために、ルビーを連れて外に出た。

晴れた星月夜で、骨身にしみるやうな寒さであつた。

美彌子は、背後から自分を呼びとめるやうな聲を聞いたやうな気がした。しかし、耳を澄ます

と、何も聞こえなかつた。

少し、神がかりになつたやうな氣持で、身體がふらふらして、地上に落着かないやうな氣持で
あつた。

そして、心の中で母に話しかけた。

「いいでせう、お母さま。私は、お母さまのおつしやつた通りしてゐるのよ。吉田さんが、安心

して戰場で、お働きの出来るやうに……、私は、わるいことをしてゐるのではないでせう。ね

え、お母様……」

急に、街の灯がうるんで見え出した。いつの間にか、自分で涙ぐんでゐたのである。

敏郎と典子とは、須磨子が亡くなつてからは、よく美彌子の家を訪ねてくれた。二人一しよに
來ることもあり、別々に來ることもあつた。

典子は、敏郎が美彌子と結婚するものと、思ひ込んで居り、それらしい扱ひをさへしてゐた。

典子は、美彌子の家に宿つて行くことさへあつた。美彌子には母の居なくなつた家中が、廣く

カラッポで寂しかつた。

二月にはいつた暖かい日であった。

郁郎は、新しい鼠色の背廣に、黄色の縞のある美しいネクタイをして、晝過ぎにやつて来た。彼も、美彌子の悲嘆と、彼女の目にも露骨に見える動搖に、思ひ屈してゐるのであつたが、その日は冬にも珍しいよい天氣のせゐか、いつになく晴やかであつた。

「動物園にでも行つて見ませうか。」

郁郎は、彼女の母の死後、初めて美彌子を誘つた。

「ええ、いいわ。」美彌子も直ぐに返事をした。

美彌子は、母が亡くなつて以來止むを得ない用事以外、外出してゐなかつた。

幼心に返つて動物園に行つて見るなど、美彌子にも好ましかつた。

美彌子は、しばらく着なかつたスーツを着た。虫除け香の匂ひがつめたく鼻を打つた。

須磨子の鏡臺から、使ひ残りのシャネルのN.O.5の香水を取り出してつけると、身邊に母の

思出が、浮び上るやうな氣がし、その香水の匂ひにつれて、吉田の事を思ひ出した。

あれから、一度手紙を出した。何だか、恐ろしい氣がして、それ以上は書けなかつた。今度書

くときは、この匂ひを備めて送らうと思つた。

「お待ちとは何の事か。」

と、郁郎を誘つて玄関を出ると、郁郎が、

「いやですよ。妙なものをつけてー」

と、美彌子の裾にかがんで、何か取つてくれた。

それは、スカートにクリーニング屋で、つけて置いた覚え書の布切であつた。

「ははははは。」

この些細な事に、二人は親しみを感じて笑ひ合つた。

「雑誌の記事に、動物園へ行く大人の数は子供の数の三倍だと出てゐました。」

と、郁郎が云つた。

二人は、山ノ手線で上野へ行き、そこから歩いた。

猛獸の居る丘から、水禽の居る大きな金網のかこひの前に出た。

美彌子は、餌を桶にあけた。手元に寄つて来たベリカンの嘴を見ると、まさまざと須磨子の

やせた脚を思ひ出した。吉田の手紙にあつた適切なたとへを氣味わるく思ふのであつた。

冬の日の常として、日がかげり始めると、忽ち寒さが、身にしみて来た。

しかし、久しぶりの外出なので、美彌子は少しも疲れず、何處までも歩きつづけたかった。郁郎が、本郷においしい天ぷらがあるから、其處で食事をしようと云ふので、二人は上野の山を下りると、辨天様の境内を通つて池の端へ抜けようとした。

不忍の池は、わびしい冬景色であつた。橋のたもとに、犬を連れた乞食がゐた。

すがれた藪の下葉をうごかしてあひるが遊んでゐた。夏來た時は、澤山見られた鯉は、何處にゐるのか、鯉の居場所も心ぼそいほど、水がかれてゐた。

辨天堂の脇から、橋にかかつた所で、郁郎が、

『しまつた！ 辨天様の前を二人で通るといけないうでせう。』
と、云つた。

『なぜ？』

美彌子は、無邪氣に訊き返した。

『その二人は、結婚出来ないんですつて……』

と、郁郎が云つた。冗談にもせよ、郁郎が二人の結婚問題に久しぶりに囁かれたので、
『悲しいわー そんな事ー』

と、打ち消したものの、美彌子は胸がドキドキした。

そして、この頃は、郁郎の善良さに參つてゐる美彌子は、郁郎が積極的に出てくれれば結婚したいとさへ考へてゐた。

池の端に出てしまふと、もう乗物に乗るほどでもなかつた。

岩崎邸の裏から、本郷へ上つて行つた。

が、目當の天ぷらやへ來て見ると、先客があり、せまい家なので、二人は順番を待つてゐなければならなかつた。

郁郎は、煙草に火をつけ、美彌子は、夕刊をとり上げてゐた。

社會面に、眼を通して讀みたい記事がないので、すぐたたまうかと思つてゐると、その下段の方にある寫眞が何か熱い物のやうに、美彌子の眼の中に飛び込んで來た。

それは、軍服姿の吉田の寫眞である、と思ふ間もなく、『吉田浩電伯傷く』と云ふ見出しが、グ
イツと美彌子の胸をつき上げて來た。

二科の中堅である吉田浩電伯は、砲兵伍長として應召、江南戦線に於て奮戦中の所、去る十七日追撃砲撃を受け重傷を負つた由原隊に通知があつた。(名古屋電話)

美彌子の眼の中で、それらの文字が恐ろしい虫のやうに、グングン動き廻つた。

彼女は、新聞の上に顔を伏せてしまつた。

美彌子は、顔を新聞の上から離すことが出来なかつた。離したら、涙がにじみかけてゐる顔を見られるのが、嫌であつたから。

「お待ちせしました。」

と、女中が揚げ鍋の前の席へつくやう案内に來た。

「美彌子さん！」

と、郁郎に呼ばれても、美彌子は、まだ新聞の中に顔を入れてゐた。

「どうなすつたのです。」

郁郎は、新聞をのぞき込みながら訊いた。

「大變！ 知つてゐる方が、戦地で負傷したの……」

「まあ、どんな關係の方です……」

吉田の事は、郁郎には殆んど話してなかつた。

「お父様のお弟子……」

美彌子は、簡單に云つた。郁郎に、いろいろ訊かれるのが、いやだつたので、さう云ふと直ぐ新聞をたたんでしまつた。

「彼方へ行きませう。」

と、郁郎があらためて云つた。

美彌子は、食事など咽喉を通らない氣持だつたが、郁郎の前で、取りみだすのは、いやだつた。

だまつて立つと、揚げ鍋の前の席へ、郁郎と二人並んで坐つた。

美彌子は、すつかり不機嫌になり、だまつてゐるので、郁郎は美彌子の代りに、種物の好みを答へたり、いろいろ世話をしなければならなかつた。

「その負傷された方は、重傷ですか。」

と、郁郎は、美彌子が知人の負傷のために、ショックを受けてゐるのだと思ふと、なくさめるやうにさう訊いた。

「新聞の記事ぢや分らないの……」

美彌子は、心ほそげに云つた。

「身體の何處でせう？」

「書いてないわ。」

「頭部か、内臓でなければ、命には別條ありませんよ。」
と、郁郎は云つた。

「迫撃砲弾に中つた負傷なんて重いんでせうか。」

美彌子の不安は、つのるばかりであつた。

「中りどころですが……」

郁郎も、答へやうもなかつた。

「重傷だつたら、送還されるでせうか。」

美彌子は、少しでもいいから、戦傷に關することが知りたかつた。

「大手術を要する場合は送還されます」

「さう……何日頃……」

「さあ……よく知りませんが、重い場合ほど早いものではありませんか。」

須磨子の死を知らず、送還される吉田の事を思ふと、美彌子は自分の飾しい責任に、ハタと氣

がついた。

食事中も、美彌子の心は、吉田の事で一杯だつた。

負傷と云つて重傷者で、すぐ追ひかけるやうに、戦傷死が傳へられるのではあるまいか。何うしたら、負傷の程度を早く知ることが出来るのだらうか。名古屋に歸つてゐるお母さんに、電報で問ひ合はして見ようか。でも、お母さんも、新聞記事以上には、何も知つてゐないのであるまいかしら……。

吉田の今迄の宛名で手紙を出しても、後送されてゐる吉田の手には、容易に届かないのではあるまいか。

吉田の元氣な手紙から想像すると、御國のために戦つてゐる勇士の姿がアリアリと眼に浮んで來たが、傷ついたと云ふ事を知ると、其處には普通人よりも、どこか痛々しい藝術家らしいか弱さだけが、残されてゐるのであつた。

生命には別條なくても、大事な右手の指などが、無くなつてゐるのではあるまいか。
それよりも、重傷で送還される日本の地に、須磨子が、生きてゐないことを知つたら、吉田は何う思ふであらう。自分の手紙の嘘がわかつた時、自分は吉田に對して何と云へばいいのだら

うか。

とにかく、前線の宛名で、吉田宛に、母の死を知らせようか。
でない、負傷してゐた吉田に自分の口から義母の死を、どうして云ひ出すことが出来るか。

いつもは、郁郎の前で遠慮なく物を喰べる美彌子が、つい先刻、(天ぶらは大好き)と云つたのに、美彌子は海老を二つ三つ喰べただけで、もう箸を休めてしまつた。
『もつと、召し上りませんか。』

と、郁郎は美彌子をうながした。

『これから、秋になると、だんだん魚がおいしくなりますよ。このぎんばう召し上りませんか。これは、天ぶらにすると、とてもおいしいですよ。』

郁郎は、美彌子の氣持を解きほぐさうと、色々と話しかけた。

彼は、美彌子の承諾を得て、一、二杯のんだビールで、いい氣持になつてゐるらしかつた。何處かで、尺八の音がしてゐた。
食事の樂しさが、彼の心をふつくりと、和やかにしてゐた。

郁郎は、美彌子が、だまつてゐることが、あまり氣にならなくなつて來た。

彼は、須磨子の死の前夜、自分から謹慎してゐた美彌子に對する求愛を、もう新しく始めてもいいのではないかと思つてゐた。

『僕は、夜眼がさめると、いつも貴女のことを思ふのですよ。貴女が女手ばかりで、あの家に住はれてゐることを考へると、氣になりますよ。あすこは、先づ郊外に近いところでせう。亂暴な強盗などが、來やしないかと思つて……』

『大丈夫ですわ。庭にはピオニイがりますし、家の中にはルビーがゐるでせう。兩方ともとても吠えますの……それに、ルビーは、決して他人に馴れませんもの。』

美彌子は郁郎にゐると思つて辛うじて口をきいた。
食事を終へて外に出ると、暖かい部屋にゐたためか、寒氣が冷たく、頬やストックキングの脚に感じられた。

郁郎は、ひどく悠々と歩いてゐた。

彼の足は、ニコライ會堂の方に向いて運ばれてゐた。

美彌子は、名古屋の吉田の兄の家には、電話があるのを知つてゐた。何でも、一二二二と云つ

たやうな女學校時代に暗記したまま忘れない佛教傳來の年と同じ番號であつた。家へ歸つたら、長距離電話をかけて見ようか、それとも電報で問ひ合はせようか。いづれにしても、郁郎と別れたかつた。

一刻も早く、知れるだけの事は知りたいーと思つた。

よほど、歸ると云ひ出さうかと思つたが、郁郎ののびのびと樂しげな横顔を見ると、やはりためらはれるのであつた。

『寒いですわねえ。』

と、彼女が氣弱く、つぶやくやうに云ふと、

『お茶の水迄歩きませう。お茶の水から省線に乗りませう。』
と、云つた。

『ええ。』

と美彌子は、うなづいた。

聖橋を渡つてお茶の水に抜けるその通りには、寒さのためか、人通りもまれであつた。
『お疲れになつたんでせう？』

と、郁郎が訊ねた。

『そんなでもありませんけれど……』

美彌子は、言外の意味をふくませた。

『これから、お歸りになつて何をなさるのです？』

郁郎は、美彌子から優しい答へを期待して云つた。

『歸つたら、吉田さんのお家へ問ひ合はせようと思ひます。』

美彌子は、つい本心を云ふ序に吉田の名前も云つてしまつた。

『吉田さん、負傷された方ですか。』

『ええ。』

郁郎は、初めて黙つた。美彌子の胸を一杯にしてゐるものが、何であつたかが、ハッキリ判つて、彼にはかたに、落着かぬ氣持が、寒さと一しよに全身にしみ渡つた。

彼はしばらくだまつてゐた。

『ああさうさう。吉田さんと云ふ方が、出征されたことは、貴女から以前、一寸聞いてゐました。その方が負傷されたのですか……』

「ええ。」

「さうですか。」

郁郎は、悵然としたやうに云つた。

「その方は、結婚していらつしやるのですか。」

と、すぐ訊いた。

「いいえ。」

「……………」

郁郎は、だまつてしまつた。

普通の知人の負傷とは、思へないほど美彌子が動揺してゐることが、彼を限りなく不安にした。

彼は、しばらく黙つて歩いてゐたが、お茶の水驛が間近になつたとき、

「僕は、貴女の心が分らないで、女のやうにいらいらする事がありますよ。」

と、静かではあつたが、思ひ切つたと云ふやうな口調で云つた。

美彌子は、一寸嘘をつかれたやうにあわて、

「母の四十九日が過ぎましたら、日本橋の伯父と相談いたしますわ。いろいろ決めて歸かうと思つて居りますの。」

と、云つた。

それは、郁郎と結婚するためのいろいろの手續についての事らしく、それで彼と結婚する意思のあることを暗示したつもりであるらしかつた。しかし、郁郎はそんな言葉を待つてゐたのではなかつた。

彼は、美彌子から、愛情の言葉の一片でもいいから、聴きたかつたのである。やさしく、自分の名を呼んでくれるだけでもよかつた。

一しよに歩きながら、美彌子の心が、自然自分以外の方に向けられてゐるのがわびしいのであ

つた。

彼が索然としてだまると、美彌子は念を押すやうに、

「遅くなつてしまつて……………」

と、辯解した。

美彌子に、愛情があれば、結婚などいくら待つてもいいし……………今のやうな美彌子なら、明日結

婚すると云はれても、嬉しくないと思つた。

郁郎は、電車から降りると、美彌子の家の前まで送つて行つた。

美彌子は、外套の光の中で、彼の表情が、うすら寒く、わびしいのに気がついたが、もう彼の機嫌を取りつくろふと云ふ餘裕はなかつた。

「ちよなら、いろいろ有難うございました。」
と、云つただけだつた。

「……………」

慰まない郁郎は、だまつてゐた。

「上つていらつしやる？ お茶召し上つていらつしやらない。」

さすがに、美彌子は、悪いと思つたらしく、さう云つた。

郁郎は、拗ねたやうに頭を振ると、だまつて不機嫌に、美彌子との間の門の戸をしめた。
「あら！ 船田さん——」

と、中から呼ぶ聲がした。

郁郎は、足早に三、四階、遠のいたが、美彌子は、一寸戸を開けただけで、追つて来ようとは

しなかつた。

郁郎は、未練らしく、一寸立ち止まつたが、美彌子は、

「ちよなら。」

と、もう一度聲をかけると、戸をしめた。

遠くの玄關の開く音と、犬の吠える聲とが、薄情らしく聞えて來た。

玄關で、靴をぬぎ、美彌子は母の居間だつた部屋にかけ込み、押入の棚に、そのままにしまつてある母の手文庫の中をかき廻した。吉田の兄からの禮状があつた筈である。

やつと探し當てると、電話番号は美彌子が思つた通りであつた。

急報で申込むと十分ばかりで出たが、東京の立花と云つても、なかなか通じなかつた。

間もなく、吉田の兄が出た。

彼女が美彌子であると云ふ事が分ると、ひどく恐縮して、須磨子の死に對するお悔みを述べた。りした。やつと、肝心な負傷のことを訊くと、兄にもハッキリは分つてゐないらしい。ただ、病院船に乗り込んだらしいから、もしかしたら、原隊の病院へ歸つて來るのではないかと云ふのだつた。

「お命に、別状はないの？」

と、美彌子は聲をふるはして訊くと、

「さあ、その邊は大丈夫ぢやないものでせうか。が、内地送還となれば、相當の重傷ぢやないのでせうか。」

と云つた。

「ぢや、精しく分つたら、すぐお知らせ下さい。」

と、云つて電話を切つたが、生命に別條がないと云ふので、ホツとしたものの、傷の程度が分らないので、心の不安は同じであつた。

夜の靜かな家の中で、思はず興奮して話したので、女中達にもきこえた見え、二人の女中は電話口に寄つて来て、

「吉田さんが、何うか遊ばしたんですの……」
不安らしく訊いた。

「負傷なすつたらしいの……」

「まあ……どこをお怪我なすつたんでせう？」

「それが分らないの……」

「まあ……それで奥さんの亡くなつたの、御存じなのでせうかしら……」

と、ふみさんが、美彌子の痛い所に觸れた。美彌子は、ベソをかきさうな顔になり、

「さあ……お手紙が、戦地に届いたか何うか……」

と、ごまかすと、ふみさんはなほしつこく、

「奥さんが生きていらつしたら、どんなに御心配なさるでせう……」

まだ、その話題を換へないので、美彌子は女中から逃れるやうに、足元を駆け抜けて行くルビ

を追ひかけて抱き上げると、

「お前の御主人は、負傷をなすつたんだよ。名譽の御負傷よ……お前は何うするの？」

と、物を云ひかけた。

それは、恰もわが心に問ひかけたやうで、美彌子は自分の心の中の吉田に對する深い關心を、

マザマザと感じた。

「私達で、せい一杯慰問してあげませうね。」

と、ルビーの耳に口をよせて、ささやいた。

五日經ち、一週間経つたが、吉田からは何の消息もなかつた。母の四十九日も過ぎた。美彌子は、毎日足が地に着かないやうな、不安な生活をつづけてゐた。

母の四十九日が過ぎたらと、郁郎に約束したが、美彌子は日本橋の義理の伯父が、四十九日に訪ねてくれたときも、その話には全然觸れようとしなかつた。

郁郎は、三日隔き位には、電話をかけて来た。その度に都合を訊かれると、元來用事のない身體だから、會はないと云ふわけには行かなかつた。

一しよに御飯を食べたり、映畫を見たりした。が、美彌子の一言一行に、そのやさしい神經をとがらしてゐる郁郎を見ると、美彌子の方でも、悲しくなつて来た。

吉田の負傷の程度が知れ、一先づ心が落ちついたら、郁郎と結婚してもいいと思ひながらも、それを口に出さなかつた。

ただ、彼女の人生に、吉田と云ふものが、大きく影を落して来て、自分でもその影の中から外へ歩き出せないやうな氣持であつた。

名古屋の方からもその後、何の消息もなかつた。吉田が乗り込んだと云ふ病院船は、何處へつたのか、上海へとまつたのか、内地へ廻航したのだらうかと、美彌子は一月近く思ひ迷つてゐた。

三月も、終りに近づいた頃だつた。美彌子は、郵便受函の中に、亡き母宛の一通の手紙を見出した。裏を返して見ると、所書も何にもなく、ただ吉田浩と書いてある。しかも手蹟は、見馴れた達筆の吉田の手蹟ではなかつた。

それでも、とに角、吉田からの待ちに待つた手紙なので、胸ををどらせながら、封を切ると、代筆で失禮致します。私は、負傷いたしました。今、内地の病院に居ります。負傷した姿をお目にかけたいと思ひませんので、お手紙もさし控へて居りました。貴女に對する私の氣持は、少しも變りませんが、出征のときのお約束はなかつたものと、お諦めをねがひます。私は精神的には、ごく平靜であります。おだやかなあきらめの境地に、達して居ります。ただ、私のために、お心をなやましたくないので、今しばらくお目にかかりたいと思ひます。

お約束は、なくなつても、お友達として未永く、お交際をねがひます。

浩

須磨子様

代筆だけに、吉田の氣持は、仄かにしか傳へられてゐないが、この手紙で想像されるかぎり、吉田は大膽な手か足かが、無くなつてゐるに違ひなかつた。

美彌子は、その手紙を見た刹那、打ちのめされたやうになつてしまつた。何もかも、手につかなかつた。

吉田が、母との約束を取り消すと云ふ以上、肉體的に不具になつてゐるに違ひなかつた。美彌子は自分の身體に、觸れて見て、右の手か左の手か、右の脚か、左の脚かと、いろいろ想像して見た。手紙が書けないのは、右の手がなくなつてゐるためか、それとも重傷のために、身體が思ふ通り動かさないのだらうか。

須磨子に、見られたくないと云ふのなら、顔にひどい傷でもしたのだらうか。

隣にゐるルビーの頭を撫でてやりながら、

「お前はこれから御主人の御用を何でもしなければならぬよ。お前の御主人は、きつと不自由な身におなりになつてゐるんだよ。」

と、云ひながらも、美彌子は、自分の出来る事なら、吉田のために、どんな事でもしたいと思つた。

吉田が、もし脚を無くしてしまつたら、彼の松葉杖の代りになる幸福をさへ感じた。

彼女は、その心持を、ありのままに吉田に傳へて、吉田を罵りてやりたいと思つた。

が、内地の病院と云ふばかりで、彼の宛名は書いてなかつた。切手に押されたスタンプを見てもうすれてゐて、肩名がハッキリしてゐないのである。

それよりも吉田の所在を訊ねあてたとしても、須磨子の死を何うして知らせたらよいか、約束を取り消すと云ふことも須磨子に對する深い大きい愛からであらう。彼は、自分から取り消しを申し出してゐても、須磨子がそれよりも、もつと大きい愛情で、どんなにひどい不具であらうが、一生彼のために奉仕することを改めて誓つたら、どんなに感激するかも知れない。須磨子は、生きてゐたら、きつとさう云ふ態度に出て、吉田の心の傷手、身の傷手を補ふだけの、大きい愛を示すかも知れない。

それなのに、自分が母の代りに吉田を訊ねあてて、母の死を知らせることは、負傷から來る心身の苦痛を健氣にもじつとこらへてゐる吉田の心境を、滅茶苦茶にすることではないか。

吉田が母に宛てて、今しばらく會ひたくないと云つてゐるのを幸ひに、このまま、何もしないで陰ながら吉田の全癒を祈つてゐる方が、一番正しい事ではないだらうか。母の遺した嘘を、少

しでも永くつづける方が、一番吉田につくす道ではないかしら……。
さう思ひながらも、美彌子は、吉田の負傷をたしかめたく、吉田に一日も早く會ひたい氣持を
制することが出来なかつた。

女性本願

吉田の手紙を見てから、美彌子は不安と焦心のためにすつかり憔悴してしまつた。
もうすぐ春が來ると云ふのに、憂鬱な日がつづいた。美彌子は毎日家にゐた。朝起きてお化粧
をするのさへ物うかつた。

名古屋の吉田の家へは、あの日直ぐ、吉田の居處が分つたら、知らせしてくれるやう速達を出し
たが返事が來なかつた。

三月に入つたばかりのある日だつた。その小人數の家に、わびしい夕暮が來て、美彌子は、自
分一人で味氣ない夕食をすました。

女中達は、どうしたのか、何時迄も食事の跡片附に來なかつた。
ラジオが、美彌子には、ちつとも興味のない天氣豫報をやつてゐた。

彼女は不機嫌になつた。

女中を呼ぼうとして、呼鈴を押さうとすると、ピオニイが急に吠え立てて、ルビーがこれにつ
づき家の中が俄に騒々しくなつた。何だらうと思つてゐると、女中があわただしい足音で、廊下
を歩いて來て、

「お嬢さま。名古屋の吉田様と云ふ方がお見えになりました。」

と云つた。美彌子は、ハッと、驚きながら、

「えつー、吉田さん、どんな方！」

と訊いた。

「三十五、六の方でございます。」

美彌子は、吉田の兄だと思ふと、胸ををどらしながら、玄關へ走つて出た。

羽織袴を着た紳士が、キチンと立つてゐた。吉田とは、あまり似てゐなかつた。

「吉田さんのお兄さま？」

美彌子が、あわてて訊くと、

「はあ……」

と、しづかにうなづいた。

美彌子は、彼を支那のすぐ傍の客間に通した。兄の家は商家だと聞いてゐるのに、少しも商人らしい容子はなかつた。氣品があつて、すがすがしい風采であつた。

雷家である吉田よりも、もつと垢ぬけがしてゐるやうな感じであつた。

いんぎんで、美彌子が困るほどの挨拶が済むと、

「實は浩が送還になりまして、東京の陸軍病院に、居るのでございます。」
と、云つた。

「ええ、東京に……」

美彌子は、恥しくなるほど、大きい聲を出した。

「はあ……東京の第一陸軍病院です。浩からは、ある時期まで見舞に來てくれるなど申して、病院の名前も知らして來なかつたのですが原隊に訊きまして、やつと分りましたのでござります……」

「お傷はー」

美彌子が訊いた。

「追撃砲の彈の破片で、顔面をやられたらしいでございます。」
と、云つた。

「まあ……」

と、云ふと美彌子は、自分の身體がふるへて來るのを感じた。

美彌子の唇の色が無くなり、風の中の小鳥のやうに、全身がふるへてゐる姿が、あまりにも痛ましかつたので、吉田の兄は、それを見たくないやうに、しばらく眼をそらしてゐたが、

「私は、今日かもめで参りまして病院の方へ電話をかけましたら、面會は午後一時から四時迄ださうで……明日改めて参ることに致しました。」

と丁寧云つた。

「私も参つてもいいでせうか。」

美彌子は、キラキラと涙にうるんだ瞳を上げていつた。

「恐れ入ります。」

「ぜひどうぞ……」

「浩も、きつと感激いたすことではございませう。」

と、また頭を下げた。

「場所は？」

「牛込の戸山ヶ原の近くですが、私が此方へお寄りしてお誘ひいたします。」

「でも、それでは却つて御迷惑ぢやございません？」

「いいえ、何う致しまして……お母さまがお亡くなられたばかりなのに、また浩の事で御心配をおかけしまして、申譯ございません……あの、失禮でございませんでしたら、お母さまの御佛前へ御挨拶させていただきたいんですが……」

と、吉田の兄は云つた。

「どうぞ。母も、きつと悦ぶと思ひます……」

と、答へながらも、美彌子には母と吉田との戀愛、一方の死、一方の負傷について、考へ切れない多くのものが頭の中につかへて、それが背負ひ切れない重味として感ぜられるのであつた。

二階の父の居間だつた部屋に案内した。そこに、母が父のために新しく買った佛壇が置かれてゐた。が、その佛壇を買つた母も、新しい白木の位牌になつて、父の位牌と並んでゐた。

美彌子は、燈をあげて、女中に命じて香爐に火を入れさせた。美彌子位の若い近代少女が佛

壇の世話をしてゐることが、吉田の兄の眼には異様に、またそれだけ却つて殊勝に見えた。

「浩が、東京にゐますときは、いろいろお母さまのお世話になつてゐたやうで……」
と、云つた。

「ええさうなんですの……母は、吉田さんをとても頼りにして居りましたの……吉田さんが出征なさるとき……」

と、云ひかけて、美彌子はハツと口をつぐんだ。

吉田を送つて行つたときの母の行動は、やはり母だけの秘密にして置かうと思つた。

「はあ、あのときはたいへん、お世話になつたやうで……」

と、吉田の兄は、また丁寧に頭を下げた。

兄は、母が、吉田を送つて行つたことを知らないのであつた。

母の佛前に坐つて、焼香してから、しづかに合掌する後姿が、さすがに兄弟は争はれず、吉田そつくりで美彌子は又、いろいろな事を考へて、胸が一杯になつてしまつた。

それでなくてさへ、夜は静かな郊外の廣い家に、若い女主人たつた一人のある家の静けさは、却つて人の心を落ちつけぬらしく、客は元の座敷へもどると、そのまま、

「では、失禮いたします。明日の十二時過ぎに、お迎へに参ります。」
こと、もう歸りかけるのであつた。

「では、どうぞ！ お待ちして居ります。」
と、美彌子は云つた。

しんとした夜の庭に、客の歩み去つて行く下駄の音が消えると、一層静かさが身にしみた。

美彌子は、吉田の兄から吉田の所在を知つて、ホツと安心すると同時にしばらく考へなかつた
慥みが、また新しい烈しさで、歸つて来た。吉田に母の死を知らせてゐない責任についてであ
る。

結局、からなれば、明日自分の口から凡てを告白して謝る外はないのであるが、母の計が、歸
つてゐる吉田に、どんな衝撃を興へるかと思ふと美彌子は、お腹の底がよぢれるやうに、苦し
いのであつた。その苦しみと、吉田が東京にゐると云ふ新しい興奮とで美彌子は、その夜、どう
しても眠れなかつた。

翌日起きて見ると、しとしとと雨が降つてゐた。が、ちつとも寒くない雨で、もう既に、朝が
近づいて居ることを思はせた。

美彌子は十時頃からお風呂にはいり、化粧を始めた。吉田に久しぶりに會ふのに、和服を着よ
うか洋服にしようかと思つたが、いつか吉田が（美彌子さんに振袖を着て、モデルになつて貰ひ
たいと）、云つたことを思ひ出し、やはり和服を着て行くことにした。お化粧が済んで着換をし
ようと立つて立ち上ると、女中が、

「船田さんからお電話です。」
と、知らせて来た。

いつもは、それが飛び立つほど嬉しい事ではなくとも、生活にとつて一つの刺戟であつた。
が、今日は、何が煩はしい仕事のやうに感じられた。

「私、美彌子……」

美彌子は、ぶつきらほろりと云つた。

「船田ですが……今日、おひまごさいませんか。」

「ごさいませんの……」

美彌子は、何の遠慮もなしに云へた。

「明日は何うでせうか……」

『明日も、駄目ですわ。』

『明後日。』

郁郎は少しあせつてゐた。

『私、當分お目にかかれないかも知れません……』

『それは、何う云ふわけですか……』

郁郎の聲は、怒つたと云ふよりも悲しげにひびいて来た。

『今度、お目にかかつたら、お話しいたします……』

『でも、急にはお目にかかれないでせう？』

『ええ、でもその裡に……』

『と云つて……』

『こちらから、またお電話します。』

『……』

美彌子は電話を切つた。

常ならば、美彌子はいくら心がせくとは云へ、そんな電話の切り方をすると、すぐ自分で氣に

なるのであつたが、今日は郁郎には、かまつてゐられないやうな、重大な仕事が自分の前に横たはつてゐると思つた。

母の居間にある箆笥を開けて、今日身につける着物を、あれかこれかを選んで取り出した。

黒地に雪と花との模様のある京御召、紫の疋田しぼりの羽織、紅梅色にたちばなを織り出した帯、しぼりの長襦袢、そのいづれにも沈んだ香の匂がした。

それは、亡き母が着てゐた着物と同じ匂である。匂はいろいろな事を思ひ出させる。美彌子はその匂で、今更のやうに、母の事をいろいろ思ひ出した。まして、傷つてゐる吉田の神經を、この香りがどんなに強く動かすかと思ふと何か空恐しい氣がして、美彌子は母が使ひ残した香水を、それ以上つけることをよした。

十二時過ぎに、吉田の兄が来て省線で高田馬場まで行き、そこから圓タクに乗つた。

電車の中でも圓タクの中でも、吉田の兄と共に、浩の傷の程度ばかりを話してゐた。

『顔面ならいいですわねえ。手足なら、切るやうな場合もあるでせうけど……』

と、美彌子は、自分で自分を慰めるやうに云つた。

『さうです。男ですもの、顔に傷があつたつて……一向差し支へありません。』

浩の兄も、心丈夫げに云つた。

「名譽の負傷ですもの……結婚の……」

と美彌子は云ひかけたが、いろいろ差しさはりがあるので、中途でよした。環状道路から左へ折れて行くと、長い塀がつづいてゐた。

「第一陸軍病院ならここです。」

と運転手が云つた。

門の前で、車を降り門にはいつて、衛兵所の後の藤棚の下を通つて、面會人受附に行つた。兄が、

「衛兵伍長吉田浩と云ふ者に會ひたいのですが……」

と云ふと、受附の兵隊さんが、

「病室は分つてゐますか……」

と、訊き返した。

「それが分らないのですが……」

と、兄が恐縮しながら云ふと、

「ちよつとお待ちなさい。」

と、云つて其處にある患者名簿らしいものを見てゐたが、

「ああ分りました。第二外科の二號室です。この用紙に貴君の名前と、患者さんの名前を書いて下さい！」

と云ひながら、面會人用紙を渡してくれた。

「第二外科の二號室と云ふのは、主にどんな患者さんですの……」

美彌子は、一時も早く浩の傷が知りたかつた。

「眼を負傷した人です。」

その兵隊さんは、ちよつと嚴肅な顔つきをした。

「あつー」

美彌子は、口の中で叫んだ。

美彌子に、吉田の負傷が眼であると聞いたとき、怖しい戦慄が、身體中を駆け通り、自分の眼までが、視力を失つて、すぐそばの衛兵所も、はるか向ふの病院の建物も、一時は見えなくなつてしまつた。

『お嬢さま、しつかりして下さい！』

美彌子の唇が色を失つたのを見て、浩の兄は、背後からしつかり、美彌子を抱き止めてくれた。

美彌子は、我に歸ると、抱き止められてゐるのが恥かしくなり、

『大丈夫です。大丈夫です。』

と、吉田の兄の手をすりぬけ、自分で立たうとして、足がふらめくのを、やつと踏み止まつた。

吉田の兄は、吉田の負傷が眼だと云ふのを知ると、卒倒する迄、驚く美彌子を、感激し易い、この年頃の少女の習ひとも考へたが、それにしても弟の負傷に、これほど關心を持つてくれる美彌子を、涙ぐましくなる迄ありがたいと思ひながら、

『お嬢様、いかがでございませう。私が、弟に會ひまして、容子を見て参りますから、それからお會ひ下さつたら如何でせう……』

と、云つた。弟の盲目になつた姿を見ると、この感じ易い少女は、本當に氣を失つてしまふだらうと心配したのである。

『いいえ。大丈夫、私吉田さんが眼の負傷なんて、全然想像してゐなかつたから、びつくりしたんですわ。もう分つたから驚きませんわ。』

まだ、頬は蒼白であつたが、美彌子は落着いて云つた。

『でございませうが……萬一……』

と、後は云ひにくさうだつた。

『御安心下さい。私、もう決して驚きませんわ。どんなお傷でも驚いたりなんかしては、すまないと思ひますから……』

と云つた。

『さうですか……』と、なほ不安さうにためらつたが、

『ぢや、参りませう。』

と、云つてから、受附の兵隊さんに、第二外科の位置を訊いてから歩き出した。病院の正面の玄関で靴を草履にはきかへ、廊下を真直ぐに、三、四十間行つて突き當ると、右へ階段を上つた所が第二外科であつた。

階段を上り切ると、その廊下がやや廣くなつてゐて、ピンポン臺や廣い机が置かれ、九官鳥

を入れた鳥籠が二つ置かれてゐた。

その机の上で、生花の先生が傷病兵さん達に、生花を教へてゐた。

その机の傍に面會人受附の札が出てゐたが、それらしい人はゐなかつた。

吉田の兄は、折から通りかかつた看護婦を呼び止めると、

『吉田浩と云ふ者に會ひたいのですが……』

と、云つた。

『ああ吉田伍長ですね。御案内しますからどうぞ。』

と、面會用紙を受け取つた。

看護婦の後から、吉田の兄と一しよについて行く美彌子の足は、風の中の蘆のやうにふるへ通しにふるへた。

生れてこんなに緊張した瞬間はなかつた。この世の中で、最も痛ましい者、しかも、もつとも淨らかに尊いものに接する氣持だつた。美彌子は、今まで宗教的な感じを抱いたことは、一度もなかつたが、今こそ普通の人間よりは、もつと尊い、何か神に近いやうな者に對する敬虔な氣持で、胸が充たされた。

二號室と云ふ部屋の前に來たとき、看護婦が云つた。

『吉田伍長はなるべく安靜にしていらつしやる方がいいんですからあまり長くお話にならないやうに……』

吉田の兄がだまつてうなづいた。

部屋の中には、頭が向ひ合ふやうにベッドが二筋に並べられ、その中央に可なり大きい机が二つ置かれてゐた。

部屋の中には、ローラカナリヤや目白や頬白を入れた鳥籠が窓際や机の上に置かれてあつた。が、そんなものは、殆んど美彌子の目にはいらなかつた。入口をはいつた利那右側のベッドの上の患者さんが、白い眼帯をして仰向けに寝ながら、レシーバーを耳にあてて、ラジオを聴いてゐる姿が眼に入ると、美彌子の眼は、涙で一杯になつてしまつたからである。

看護婦は、ベッドとベッドとの間を左に折れ向ふ側の一番左のベッドの前に止まると、

『吉田伍長御面會人です。名古屋のお兄さんと、立花さんといふ女の方です。』
と云つた。

見ると、その鐵のテスリに、吊されてゐる黒い板に白墨で、

と、かかれてゐた。

美彌子は、それを見た途端よろめくと、その鐵のテスリに手をかけて、ひざまづいた。

看護婦の紹介で、(立花さんと云ふ女)を、吉田が義母須磨子だと思ひはしないかと云ふことが、この大きい悲しみの中の惱みであつた。

「浩！」

兄は、しづかに落着いた聲で云つた。さすがに、取り亂した所はなかつた。

「兄さんですか……」

と、吉田はかすかに頭をうごかした。

白い布がいたましくも兩眼を掩うてゐるが、聲は割合朗かであつた。

「眼をやられたのか……」

「はあ……」

息づまるやうな沈黙があつた。

「立花先生のお嬢さんも、御一緒だよ。お前のことで、たいへん心配して下さるぞ……」

「さうですか。すみません……」

テスリに身體を支へて、むせび泣きをこらへてゐた美彌子は、やつとかすかに聲をあげて泣いた。

「たとひ、眼を負傷したからと云つて、生命に別條がなかつたんだから、お前はありがたいと思はなけりやいけないね。」

と、吉田の兄は慰めて云つた。

が、失明した畫家と云ふ事を考へると、美彌子は、胸が一杯で、しのび泣きの聲が高くなるばかりであつた。

兄の言葉に、吉田はしづかに答へた。

「ほんたうです。戦場で、命を捨てた人達のことを考へると、僕は幸福だと思つてゐます。物が見えなくなつた當座は、随分あせりましたが、今では落着いて來ました。安心して下さい。」

「お母さんを初め、家の者はみんな達者だ……」

と、兄が云つた。

『さうですか。僕も、健康は、とてもいいです。』

と、吉田が答へた。

兄弟の間答の間、美彌子は、やつとテスリにつかまつて、身を起して、そつと吉田の顔を見

た。吉田の圓い五分刈の頭と、その兩眼に痛々しくかけられた眞白な繻帶を見ると、美彌子は自分の息が絶えるやうな衝動を受けた。

吉田は、健康はいいと云つたが、見違へるほど瘠せて、皮膚も土色をしてゐるやうな感じがした。

ハッキリ影を作つて浮き出してゐる骨格などを、一目見ると美彌子には、新しく深い悲しみが、こみ上げて來た。

眼のあたり吉田を見た今は、義母の死をかくした事や、それについての色々な煩悶などは、すつかり忘れ、明をうしなつた吉田の心の苦しみだけが、ヒシヒシと自分の胸に應へて來るのであつた。

美彌子の顔が、近づいたのを、吉田はそれとなく感じたのであらう。

『美彌子さん……』

と、呼んだ。静かな聲であつた。そのかすかに開いた唇から、こればかりは以前と變らない綺麗な齒が見えた。

『はあ……』

と、答へたが、悲しさに堪へられなくなつて、やや高い聲を出して泣いた。

『美彌子さん。悲しまないで下さい。僕は満足してゐますよ。それよりも、貴女にはいろいろ御心配をかけたり、お世話になつたりして……ほんたうに、ありがたうございます。』

と、美彌子をなだめるやうに云つた。

美彌子は、吉田の落着に、かへつて慄然とした。半面白い布で、掩はれた顔が、彼女の方に向けられてゐた。

そして、彼の唇元の表情には、優しい口頃の彼の心が、いよいよやさしくなつて現はれてゐるやうな感じでさへあつた。

吉田の、以前と少しも變らない唇元のやさしい表情に勇氣づけられて、美彌子は、今こそ母の

死を知らさうと決心した。

右側のベッドは、初から人がゐなかつた。このとき、折よく左側に寝てゐた、これも眼帯をした患者さんが、立ち上つて廊下へ出て行つたので、美彌子は、凡てを打ち明けて、謝るのにはいい機会だと思つた。

吉田の兄も、遠慮してくれたのか、四、五尺ベッドから離れてゐた。

「ねえ、吉田さん！」

美彌子は、涙を抑へ、しつかり氣をしめて、聲を出したつもりだが、またわれにもあらう、尾がふるへた。

「はい……」

吉田は、軍隊式に力づよい返事をした。

「わたし、おわびをしなければならぬ事があるの……吉田さんに、たいへんな嘘をついてゐたの……」

「……」

吉田は、だまつてゐた。

「お母さまの手紙よんで下さいましたの……」

「僕の負傷したのは、二月の初です。お母さまの下さつた一月十日の手紙は、自分でよみました。一月十五日の手紙は人に讀んで貰ひました……」

「私、どうしませう……お母さまは……お母さまは……」

と、美彌子は、またテスリにもたれて泣き出した。

母の死を、美彌子自身の口からは、何うしても語れないのであつた。

「美彌子さん……貴女のおつしやらうとしてゐる事は、僕にもう分つてゐました。やつぱり、さうでしたか……さうでしたか……」

「……」

美彌子は、吉田の直感が怖しかつた。

「何時、お母さまは亡くなられたのです？」

吉田は眞實へと、一足飛びに飛び込んで來た。

「去年の暮よ……三十日……」

「さうでしたか……お手紙が、あなたの代筆になつてから、ズーつといけなかつたのですわね！」

吉田の聲は、澄み返つてゐた。

『さうなの……』美彌子は、かすかに答へた。

『さうですか……僕は、お別れするとき、そんな豫感がしたのです。しかし、僕は眼が見えてゐる間は、お母さまは、生きてゐる事だと思つてゐました。貴女のお書きになつた手紙も、お母さまの筆蹟だと思つた位でした。しかし、眼が見えなくなつた途端に、頭が澄んで来て、お母さまの亡くなつた事がハッキリ分りました。第一、眼が見えなくなつてから、僕の臉の中に浮ぶお母さまの顔が、生々として來たのです。その顔を見てゐると、お母さまの顔は、この世の人でないやうな淨かさに輝いてゐるのです。そして、僕には、凡ての事情が分り、貴女がお母さまの代筆をして下さつたお心が、ありがたく感じられて來たのです。ほんたうに、御苦勞をかけてすみません。あれで、よかつたのです。ほんたうに、ありがたうございます。』

吉田のしづかな言葉は、美彌子のお正月以來、不安と焦燥とに悩みぬいた心を、慈雨のやうに、うるほしてくれた。吉田の心は人間ばなれのした大きな愛情で一杯になつてゐるやうで、美彌子は吉田を慰めに来て、却つて吉田から慰められたやうな氣がした。

『私、吉田さんに申譯ないと思つてゐたの……でも私は何うしても云へなかつたの、本當の事

を……』

と、美彌子は、はげしい泣き聲にならうとするのを、じつとこらへながら云つた。

『よく分ります。貴女のお氣持は……僕こそ、貴女に御心配をかけてすみません……どう、お禮を云つてよいか。』

美彌子は、吉田のやさしい言葉を聴く度に、いよいよ泣けて來てすすり泣きの聲が、だんだん高くなつた。

吉田の兄は、見かねたのか、病室から廊下へ出て行つた。

美彌子は、吉田の兄が居なくなると、一層激しく泣いた。

『どうぞ……泣かないで下さい。あなたが、そんなにお泣きになると僕まで悲しくなりますから……』

と、云つた。

さう云はれて見ると、美彌子は自分よりも遙かに、大きい悲しみをこらへてゐる吉田が、氣の毒でたまらなくなつた。

美彌子は、やつと泣き止むと、

「私、お母さまの代りに、どんな事でもしますわ、毎日、病院にお見舞に來ますわ。私吉田さんが、許して下されば、一生吉田さんのお傍に附いてみますわ。」
と、云つた。

「……」

吉田は、何とも云はなかつた。

「ねえ。吉田さん、私毎日、お見舞に來てもいいでせう？」

「……」

「ねえ……」

吉田は返事をしないので、美彌子は吉田の耳許に口を寄せて云つた。

「美彌子さん、そんなに僕の事をかまつて下さつては困ります。貴女は僕には、勿論ない人なのです。貴女のお氣持はたいへんうれしいとは思いますが、貴女は僕のためなど、あまり心を使はないで下さい。お見舞も、月に一度も來て下されば、澤山です。貴女が僕の事で、あんなに心配して下さつただけでも僕は貴女のお父様に、申譯ないと思つてゐるのです。どうか、これ以上、僕の事で心配なさらしないで下さい。」

「まあ、そんなことをおつしやつて……」

美彌子の聲は、また涙にうるんでしまつた。

「僕は、僕の負傷で、少しでも貴女の心を暗くすることは、悲しいのです。美彌子さん、どうか私にこれ以上かまはないで下さい。」

「だって、私は、吉田さんの事が私の生活で一番大切な事に思はれるのです。」

と、美彌子は云つた。

「それはいけません。美彌子さん！」

吉田は、美彌子のほとぼしる情熱をハッキリ押し止めるやうに云つた。

「僕の負傷は、眼球内の出血です。手術に依つて視力が恢復するかも知れないのです。また、このまま失明するかも知れないのです。が、失明したにせよ、僕は僕らしく、その不幸を自分で背負ふつもりです。美彌子さんのやうな僕にとつては、一番大切な人に、それを分けて貰はうなどとは思ひません。美彌子さんは、僕などに介意はないで、幸福になつて頂きたいのです。亡くなつたお父さまも、お母さんも、どんなにそれを望んでいらつしやるか分かりません。僕も、その方がどんなにうれしいか分らないのです……」

美彌子は何も云へなくなつてだまつてしまつた。これ以上、何かを云つて心に悩み多い吉田を苦しめてはならないと思つたから……。

丁度、この時吉田の兄が、病室へはいつて来た。彼は、廊下で吉田の係りである看護婦さんに、吉田の症状や、治療の見込などについて聞き質してゐたらしかつた。

「お嬢さま、そろそろ歸りませうか、あまり面會時間が長くないやうに、看護婦さんから注意を受けましたから……」

と、美彌子の心を傷けないやうに、ものやはらかに云つた。

「はあ……」

美彌子も素直に立ち上つた。

「おや、浩！ わしは、今日用事もあり名古屋へ歸るからなア。當分來ないかも知れないよ。」

「はあ！ 結構です。」

「わしの代りにお母さんをよこすかも知れないよ。」

と、附け加へた。

「お母さんには、心配をかけたくないんですがね。」

と、吉田は、困つたやうに云つた。

「お母さんは、お前の傷が、どんな傷であらうとも、お前を一目御醫になつた方が、安心なさるだらう。今度だつて、一しよに來ると云ふのを、無理に止めて來たんだから……」

「どうですか……」

と、吉田は、それに抗議をしようとはしなかつた。

建物を出て、門の方へ歩きながら吉田の兄は美彌子に云つた。

「落の負傷は、眼球出血で、レントゲンで見ると眼球の中に、砲彈の破片がはいつてゐるさうです。」

「まあ……」

「しかし、手術は出来るさうで、電氣磁石でその鐵片を吸ひ出すさうです。」

美彌子は聲も出なかつた。

「七十パーセントは、視力を恢復するさうですから、浩もよくなるのではないでせうか……」

「お祈りするわ。神さま……」

美彌子は、胸で手を合はした。

「明日あたり、手術をするから四、五日来ないやうに……と、看護婦さんが云つてゐました。」

美彌子は、毎日でも来たい氣持であつた。

四、五日面會謝絶と云ふことであつたが、美彌子は待ち切れず、中一日隔て病院へ行つて見たが、面會することが出来なかつた。その翌日も病院へ行つて見た。その日も吉田に會へなかつたが、美彌子が受附を頼んだ看護婦さんが、吉田の右眼の、手術後の経過がよいことを話してくれ、明後日来たら、多分會へるだらうと云つてくれたので、美彌子は嬉々として、家へ歸つた。看護婦さんに云はれた日に、美彌子は病院へ行く前、澁谷で電車を乗り換へるとき、花屋へ寄りや匂ひを、なつかしがるだらうと思つたからである。花の外に、お菓子を買つて病院へ行つた。

吉田の頬の色が、この前よりも生々としてゐるやうに見えた。

「吉田さん！ 美彌子よ。」

と、ベッドのテスリに手をかけて云ふと、

「いらつしやい！ ありがたう。」

と、吉田は元氣よく迎へて呉れた。

「お花を買つて来ましたの。いけません？」

「いいえ、花の匂ひがするので、うれしくなつてゐるところです。」

美彌子はフリジャを吉田の手に握らせ、

「何か、お解りになりますか？」

と、云つた。

彼は、花を大事に手さぐりながら、匂ひをかぎ、

「フリジャですか。」

と、云つた。

「さう……」

「花も葉も冷たいですね……」

「これは……」

と、他の花を渡した。

「カーネーションでせう。」

「あら、すぐ解りましたのね。」

「だって、少し水気がなく、匂ひがないから、すぐ解りますよ。色も、あてて見ませうか。」

「ええ。」

「ピンクでせう。」

「あら……」

「置ひましたか……」

「いいえ。ピンクよ。なぜ、お解りになりました……」

「……」

「このすべすべした暖かい花びらは、何ですか……」

美彌子から、花束を受けとつた吉田は、自分で觸り始めた。

「もう少し、下の莖をお持ちになると分りますわ……」

「あいた！ 薔薇ですね。」

吉田は、笑つたらしかつたが、それは目元が、少しほころびただけだつた。

薔薇の花を、胸にじつと考へてゐる吉田に、

「どんな色か、お解りになります？」

と、美彌子は訊いた。

「アア……」

吉田は、しきりに匂をかいた。

「暗紅色……深い深い赤でせう。」

と、吉田は云つた。

「まあ……」

「當つたのでせう」

「ええ。」

彼の勘のよさに、美彌子は驚いた。眼が見えないでも、こんなに勘のよい吉田は、自分の心の底の底まで、知りぬいてゐるのではあるまいか。さう思ふと、美彌子は恥しくなる一方、胸の中に小妖精がゐて、太鼓でも叩いてゐるやうに、心が弾んだ。